
キミtoオレ

洗井 あい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キミとオレ

【Nコード】

N2064A

【作者名】

洗井 あい

【あらすじ】

降出した雨はなかなか止まず、滑り台の下で雨宿りをしたキミとオレ。なぜか運命的とも思えるオレたちの出会い。それが、荒んでいたオレの心にわずかな光りを灯した。けれど、オレがその優しさに溺れることは許されるのか？

第1話

キミとオレが、こんな時に逢ってしまったからかもしれない。キミも、オレも、身体が離せない。いや、寄り添ったまま身動き出来ずにいる。しかたないか、外は土砂降りの雨で、凍えそうに寒くって。こうしてジっとしてないと、濡れちゃうしさ。もう少し小降りになるまで、動かない方がイイにきまってる。

あまりの寒さに尻のポケットのボトルに、手を伸ばしかけたけど、一緒に居るキミに遠慮してか、その手は止まってしまっていた。オレは正直酔ってるし、キミは恐ろしく愛想がない。息を止めて、キミの横顔を見つめるだけ。だめだ、マジ、寒くって・・・止めようと力んでも、身体がガタガタと震えだし、歯が噛み合わなくなる。

「ウー、スッゲーー寒くない？」

「オレは、平気っす、スゲー震えてますね。」

公園の遊具の下、半径数十センチで、1時間以上雨宿りしてるオレとキミ。案外、間抜け？降り出した時に、少し濡れても走って帰ればよかった。こうして立っているのも、ヤケに疲れる。後悔しても後の祭り・・・こりゃ、嵐だ。ゴーゴーと風も吹き始めて、ヤバさ満点。下半身はビッチョリと濡れて、身体の芯まで冷え始めていた。

「あの、ウチ、近いんで、来ます？」

「近いの？」

ボウヤ、今頃なんだよ、それ。雨宿りの相棒の、唐突な申し出に少しばかり腹が立った。何でもっと早く言ってくれないのかって。

まあ、言い出せない気持ちも解らなくは無い、オレなら、まず言うわけないし。まあ、キミは、・・・・オレよりかは親切だ。

「はあ、そのマンション。見えます、あそこ。」

「まじ？ いいの？」

酔っているせいもあるか？ 本当に、寒いって話で。寒すぎて力んで、頭がズキズキする。

とにかく、座りたい。

「ここに、ずっといる気ですか？」

「ありがと、お言葉に甘えます。」

見ず知らずのキミに世話になるなんて、オレにとって前代未聞だね。素直にキミの申し出に従った自分自身にすら驚いてる。酒が入ってるからかな、素直になれるのかも。

「走りますよ、せーの！」

キミの号令と共に嵐の中に飛び出したオレは、飛び出したことを、一瞬にして後悔していた。

顔面に、首筋に、激しく打ちつける雨に身震いする。頭先从らつま先まで、バケツで水をかぶったも同然。濡れねずみ・・・とは、このことだろ？ なあ。恨めしく思いながら、横を走るキミの顔を見つめた。キミは、薄ら笑いを浮かべてオレに肩をすくめて見せた。

パンツの中までずぶ濡れなんて、いつ以来？ いや、こんなになるなんて初めてなんじゃない？ 参った・・・ホント、参った。駆け込んだ建物の下、互いに無事を確認するかのようにつま先から、頭の方まで視線を走らせていた。

キミもオレと同じように全身ぐっしりと濡れて、瞳に掛かった前髪から、冷たい雨水が滴り落ちている。そのキミの濡れた姿が、あまりにもリアルに見えて、無意識に後ずさりしてしまう無様な自分はナンなんだ？何、これは・・・若さに当てられてる？

「ウチ、4階なんです。」

「あー、ああ。」

キミの後に従って乗ったエレベーターの中、オレたちの吐く白い息に、ドアのガラス窓が曇っている。あっという間に、エレベーターの床に水溜りが出来ていた。相当な濡れ方だもんな、当然。

壁にもたれたキミは、オレの意識しないで見つめていた視線を感じてなのか、明らかに頬を紅潮させ、バツが悪そうな顔で無言のままうつむいていた。中学生かな・・・まだ完成されていない肉体が濡れたシャツの下に浮かんでいた。

初々しい少年の肉体に見とれ、ほんの一瞬、瞬きをした間に、エレベーターのドアが開かれた。乾燥した廊下に、濡れた靴先を1歩前へ進めた途端、何故だか、オレの視界がグラリと歪む。ヤバ・・・イ・・・よ・・・

「ちょ・・・と!!」

キミが咄嗟に差し伸べた手が、オレの濡れた洋服の肩を掴んだ。どうやらオレは、自分の意思とは無関係に膝から崩れ落ちていた・・・見る間に頬に当たった乾いた床に、頭から水が流れ落ちていく。

「ちょっと! ねえ!! ねえってば!!!!」

ゴメン、ダメっぽい、オレ・・・意識が、思考能力が、ボタンと音を立てて途切れた。

第2話

どーしよ、どーしよ、どーしよ！パニック。

ママもパパも帰ってきてないよ！。変なお兄ちゃん、マジ倒れちゃったよ！。

マジどーしよ！。

「もー！」

オレは、ヤケクソ。二部屋分、ぶっ倒れたお兄ちゃんを必死で引きずった。

乾いた床に、濡れた体は、面白いように滑る、まるで・・・雑巾！ポツポツ降って来た時に、さっさと走って帰ってくれば良かった。

なんでこんな目に合ってるの？

そりゃユウタのせいだ、アイツがスグに来なかったからだ！

原因は、そう、アイツだ！

あれ？ウチのカギが開いてる・・・ってことは・・・

「ユーーーーターーーー！！ぶっ殺す！！」

「ああ？」

リビングから暢気に顔を出したユウタが・・・やっぱ、固まった。

目が点って状態でさ。オマエ、ほんと、わかり易いわ。

いいから、早く、見てないで、来い！！目からビーム。

オレはズルズルと、お兄ちゃんを玄関先に引きずりいれた。

「誰？」

「知らない。」

とにかく、自分が先かも、めっちゃさむ。

濡れたまま滴垂らしてウチに上がった。とにかく風呂場に直行して、ビチヨビチヨの服、全部脱ぎ捨てて、洗濯カゴに放り込んだ。

クシュン！

「何アレ？」

「エレベーター降りたら、急に倒れた。」

風呂の蛇口をひねりながら、オレはタオルで頭を拭く。

ズーッっ、あー、もー、鼻水まで、出てきた。

「濡れてるしー」

「濡れんだろー、雨人中、公園からウチまで走ってきたら！」

ユウタは、洗面所のところにつ立って、オレと、起きないお兄ちゃんを、交互に見ている。

「何で？」

「ゴキっ！！」、いい音♪馬鹿の頭は、空っぽだもん。

「いってえー、何すんだよ！」

「オマエを待ってたんだろ！」

コノヤロー、オマエが公園で待ってろって言ったくせに！

ウチに鞆置いてくっからって言ったのは、オマエだー、ユウタ。

もう1回、馬鹿の頭を思いっきりグーで殴ってやった。

「なーんで、オマエがウチにいんの！」

「下までオヤジに送ってもらってさー、上、来たら、オバさんが上がって待ってなさいって。」

オマエはニワトリか！自分で言って忘れるなんて、100万年早いワ！

ビデオ、借りに行くんじゃないのかよー。

「オマエが公園で待ってろって言うから、オレは公園で今まで待ってたんだぞ。」

「ごめーん、忘れてた・・・で、この人、どーすんの？」

あ・・・忘れてた。

とりあえず、ユウタにバスタオルを投げつける。

「オマエ、その人の服脱がして、拭け！」

「なんでー！」

「オマエのせーだからー！！」

チィツと舌打ちをしたけれど、ユウタは頑張った。

頑張って、まったく動かないお兄ちゃんの濡れて体にへばりつく服を、全部剥ぎ取った。

「どーすんの、コレ？」

「コッチかして、乾かすから。」

思う存分水分吸ってますって服を洗濯機に入れて・・・脱水？わかんね・・・いいや、洗濯しちゃうおー。よかったーウチの洗濯機、外国のヤツでー。乾燥までお任せだもんねー。洗濯機は、ガラガラと転がり始めた。

あとは・・・「ユウター、コレ、着せといてー。」、客用のバスロブを、おもいっきり玄関の方へ投げた。

「ついでに、ソファーにでも寝かしといてー」

オレは、風呂で温まるんだ。

凍え死にそうだもん・・・あ・・・あのお兄ちゃんも凍えてた。

凍死？んな、ナイナイ・・・たぶん・・・

廊下でユウタが悪戦苦闘状態で、必死にお兄ちゃん引きずっていた。
オレよりデカイくせに、全然、腕力ねーなー、オマエ。

「このヒト、スゲー冷たいぜ、風呂、入れたらいいんじゃないね？」

「やっぱ、そう思う？」

真っぱになった、冷たい体のお兄ちゃんを、オレとユウタで持ち上げて湯船に沈めた。

ブクブクって沈んでったよ・・・死ぬ死ぬうーって！

ヤバー！！オレは慌てて、沈んでいくその体を押さえた。

「あつぶねー・・・ヘツ・・・ブシュン！！」

「トモも入っちゃえよ、オレ、この人押さえてるからさあ。」

「そーだなあ。」

ズズーっ。

垂れてきた鼻水をすすり上げ、お兄ちゃんの長い足をどけて、お湯に入った。

「はーはー」生き返るううう・・・あそこに1時間だもんなあ・・・
・冷えるって。

ユウタは、後ろからお兄ちゃんの両脇を軽く押さえていた。

「ユウタ、スソが濡れてるよ。」

「あー、いいよ、別に、乾くし。」

お兄ちゃん、やっと血の気を取り戻したみたい。
顔色が、さっきよりよくなった。

オレが雨ん中走らせたから、死んだなんてシャレになんね。

「この人さー、薬、やってね？」

ユウタは、後ろからお兄ちゃんの顔を覗き込んだ。
ガリガリだー、この人。

ユウタのが、顔デカイから。

「しらねー、合った時は、もー酔っ払ってたけどさ。」

「酒と一緒に薬のんだっぽくネ？」

そーゆーのに、本当詳しいよなあー。

オマエみてえに、そーゆー友達はいねーもん、知らねーって。

そういう話する時のユウタは、オレよりずっと大人びて見えた。

「だよなー、熱は・・・無いしさあ。意識落ちんのフツーねえし。」

別に注射の痕みたいなのは、無いみたいだけど・・・
薬飲んでるかはわかんねーなー、それか・・・アル中？

「もしかしたら、ブラックアウトってやつかもな。」

「なにそれ？」

「酒飲みすぎて、意識ブツ飛んじやうヤツ。」

それだわ！

公園で、あんな風に突然一緒になったときは、酒臭くて、フラついてて、ヤバイ感じだった。

何かの時は逃げればいいやーなんて、一緒に雨宿りしてたけどさ。

あー、でも、さっきまで、走る直前まで飲んでたかも。

そうだ、公園で、何か、ずっと、飲んでた。

「尻ポケットに、テキーラ入った携帯ボトル入ってたし。」

「まじ？・・・って、オマエ、飲んだ？だろ・・・顔、真っ赤。」

あははははーって、毎度のこと笑い上戸なヤツ。

あー、馬鹿だなー本当、オマエ、弱いくせにさあ。

後から、ゲーゲーやっちゃうくせに、何で、飲むんだろうな。

ユウタ、ほんと、アホだ。

すっかり温まったオレは、出掛けに、ユウタの頭をもう1発ぶん殴った。

「いってー！ー！」

「ちゃんと押さえてろよ、沈むぞ。」

真っ赤な顔で、怒ってんだか酔ってんだかわかんない顔してる。

目は完全にトロンと酔っ払った目してる。

吐く時は、トイレで吐いてくれよなー。

第3話

この柔らかな暖かい触感は何だろう、自分の腕の中に人のぬくもりを感じている。

それと、芝生のような、湿った青臭い匂いも。

重たい瞼はまったく動いてくれず、鈍い感覚のまま指先に触れているものを確かめる。

髪の毛。固い、刺さるような髪、ムースで固められた頭。

耳。赤ちゃんみたいフニャフニャだあ、気持ちイイ。

ん？脂ぎってんな顔、化粧落とさないで寝たなコイツ。

どこの女の家で寝てるんだ？腕枕して寝ちゃったんだな。

でも、だれ？ちつとも思い出せない。

んー、まあ、どうでもいいかー。

スゲー寝た気がする、1週間は寝ないでも良さそうかも？

でも、スゲー頭がいてえ。飲みすぎですね、反省。

いつつも、その場限りの反省だけど。

オレの腕枕で眠る、どっかの女を引き寄せて抱きしめた・・・

『うっわああ！誰だ、オマエー！』

やっとオレの意志に従った、瞼の隙間に飛び込んできたもの。

誰？コレ、誰よ！この少年は、一体、何？

驚いた拍子に突き放した少年は、まったく起きる気配がない。

オレは、まったく見覚えが無い少年に頭を抱えた。

マジ、ダレ、コレ！

やっちゃった？いや、ありえねえな。

でも、オレ・・・真っぱなんですけど、なんでよ？

マジに焦ってる、フツの状況じゃありませんから。

ココ、どこ？

ずっしりと重い頭と身体が、思考能力を完全に麻痺させてる。

思い出せない・・・う、トイレ、トイレしたい。

その部屋を出ると、廊下の奥にリビングらしいガラス戸があった。

誰か、居る。

ゲームの音がする。

暗い部屋に、画面の明かりだけがチラついていた。

思考を取り戻そうと努力したけど、無理。

オレ、何してたんだっけ？

真っばの上に、バスローブに着てる理由も知りたかった。

トイレで用を済ましたオレを待ち構えていたのは、

オレの腕の中にいた少年とは違う、別の少年だった。

「あの、起きました？」

ゲームしてた子だな。

甘酸っぱい、無垢な感じの少年が、恥ずかしそうにオレを見た。

んー、ダレだっけ？

必死で記憶の糸をたぐり寄せる・・・酒、雨、

「公園！」

オレの急な大声に、少年はビクリと後ずさりする。

あー、なんとなく思い出したああ。

公園で雨宿りだ！

昼頃からダラダラ飲んでたら、雨に降られて・・・
ああ、思い出した・・・この子と一緒に長いこといたんだっけ。

「あの、大丈夫ですか？」

「ごめん、よく憶えてないんだ。」

少年は引きつったような愛想笑いを浮かべ、オレとの間に距離を置いた。

「キミの家？」

キミは黙って頷く。

なんで、オレは、ココにいの？と、口を開きかけた時、ふと、滴に濡れたその横顔が目の前に浮かんでくる。

「あの、オレが誘ったんです、雨が止まなくて、ウチが近かったから。」

走って帰ってきたんですけど、エレベーター降りたら、急に倒れて・・・」

「マジ？ゴメン、迷惑かけちゃって。」

あちゃー、やっちゃったのねえ・・・意識喪失。

マジで酒、止めるか？・・・止められないでしょ。

「すみません、一緒に寝てたの友達なんです。」

酒、弱いのに、少し飲んじやったみたいで。」

「あはは、オレ、犯してないよね？」

「ハハハ・・・たぶん。」

かなり引かれてんな、オレ。

そりゃそうだよ、見ず知らずの他人だし、酔っ払いだし。
キミの親切に感謝しなきゃいけない。

少年の好意な申し出に甘えて、洋服が乾くまでの少しの間、
お邪魔させてもらうことになった。

倒れてる間に風呂にまで入れてもらって、誠に申し訳ないです。
情けなくて、顔から火が出そうな勢いだよ。

「おウチの人は？」

「帰ってくるの、夜10時ごろなんです。」

少年が気を遣って入れてくれた、暖かい紅茶をすする。
いづりだろう、紅茶なんて飲むの。

「あの、お名前は・・・？」

「ハルキ。佐川ハルキ、キミは？」

「内藤トモトシです。」

ニツコリと微笑んだだけなのに、彼は表情を強張らせうつむいた。
オレ、そんなに怖いかな？

「お、おいしいよ、紅茶。」

「ありがとうございます・・・」

ぎこちない、奇妙な空気が二人の間を流れていた。
あー、シラフじゃ耐えられねーって。

何事にも逃げ腰だって。だから、飲んで誤魔化すって話も？
苦痛すぎる沈黙に、オレは今にも倒れそうだった。

第4話

怖いよー、まじで怖いよー。

ユウター、お願いだから早く、起きてきてよー。

絶対、この人、アル中だよー。

でも・・・

両手で大事そうにマグカップを包み込んで、

オレの淹れた紅茶を、本当に美味しそうに飲んでくれる。
アル中なのに。

ギラギラして、刺す様な視線だったのに、

今じゃほら、ビククリするくらい優しい色の瞳に変わった。
アル中なのかな？

「あのさー。」

「は、ハイ！」

ビクッ。

身体が無意識に硬直してしまう。
やっぱり、怖い。

「あー、オレの服、まだ乾かないかな？」

「今、みてきます！」

弾かれたように立ち上がって、洗濯機へと飛んでいった。
けど、無情。

乾燥終了まで1時間強。

今、取り出しても、着れるわけないし。

あと、1時間の辛抱、7時までの辛抱かよ。

一人じゃ、絶対、耐え切れない。

寝ているユウタの様子を見にいったら、その無防備な顔に段々と腹が立ってくる。

・・・チッ！ ガスッ！！

『だっ！！ 行ってなーあ、何すんのよおもー。』

気持ちよさげに惰眠をむさぼる、

このノーテンキヤローの空っぽの頭を思い切り蹴飛ばしてやった。
マジ、腹立ってきたし。

「いつまで寝てんだ、さっさと起きろよ。」

「何時ー？」

「6時前」

ユウタは大きく伸びをして、『ブッ！』っと一発大きいオナラまで付けて。

あーあー、コレが女子に1番人気の真の姿、女子に見せたいよ、ホント。

「あの人は？」

「まだ居る。」

だらしなく胸元が開いた、ユウタのシャツの下、褐色に焼けた肌が、白いシャツに際立っている。
いいな、その体。

「なんで？」

「服が乾いてないから。」

ユウタに向けてしまった視線に、なんだかちょっと気恥ずかしくなる。

バカから顔を背けるように部屋を出て、オレはリビングに戻った。

「すみません、服、あと1時間ぐらい掛かるみたいで。」

「別にいいよ、乾いてなくても。着て帰っちゃうから。」

そんなの、ダメにきまつてる。

オレ的に、許せないし。

人道に反してる。

雨だって、まだ、嵐みたい。

風だって、ほら、ビュービューいつてるのに。

「嵐みたいだな。」

「そ、そうですね。」

二人とも、窓ガラスに打ち付ける雨だれを見つめた。

その時・・・

『ぐくくくっ』

オレとハルキさんは、音のした方を同時に振り返った。

頭をかきながら腹を擦って、ニヤリと笑うユウタが立っていた。

第5話

雨脚が弱まるどころか、強くなる一方だ。

ポツポツポツと、窓ガラスに当たっていた雨は、今じゃ、激しくガラスを叩いている。

こりゃ、また、ズブ濡れだ。

帰りの事を考えると、これまた憂鬱になる。

それ以前に、どこに帰れるかが問題なんだよ。

今朝方、女と大喧嘩して家を出て来たんだっけ。

今更、些細な事をクドクド言われてもなあ・・・

だったら、オメーはどうなんだ！

と、言い返せないのは、ヒモ状態だから？

最近、他の女を切ってたからなあ・・・

悲しいかな、行く当てがない。

ボンヤリと窓ガラスを流れ落ちる雨水を目で追っていると横顔に、やけに強い視線を感じ振り返ると、つぶらな瞳。

オレもこんな澄んだ目、してたかな・・・中学ん時。

ガキのころから荒んでたからな、そんな目してたのは

赤ん坊の頃だけだったかもしれない。

焼けた肌に、その端正な顔立ち、オレには、とってもまぶしい。

「トモくんは？」

「あいつ、洗濯物とりに。」

腹減ってんのに、何も作ってくれないってヒドイですよ。」

彼はそういいながら、その瑞々しく引き締まった体の腹を押さえた。さっきみたいに、腹の虫が聞こえてきそうな顔だな。

このトシの頃って、何もしてなくても腹が減るんだ。

食べたいからじゃなくて、体が欲っしてる感覚。

ひもじさに、ユウタ少年の瞳が潤む。

「何か作ってやるよ、お礼にさ。」

「やった！」

素直に喜んでもらえると、逆に気恥ずかしい。

酒が抜けて重くなった体を奮い立たせてみる。

人んちのキッチン勝手に使って申し訳ないけど、

オレも少々小腹が減ってきたし。

どっかの外国製の冷蔵庫がエライデカイ図体で、その存在を主張してる。

このウチ、外国製品多いな・・・ガスもかよ。

冷蔵庫にはこれまた、インターナショナルな食材。

「すげーな。」

「トモンチ、銀行のところでカフェやってるんですよー。」

オレが冷蔵庫を覗いて感嘆の声を上げると、

ユウタくんの声が、背後から降って来た。

銀行のとこのカフェ・・・

ウチの店の近くじゃん、何回か、入ったことある。

「マーサ？」

「そうそう!」

あそこのオーナーのウチか・・・どーりで、イイ感じな訳だ。
やっぱ違うんだな、カフェやってる人の家は。

カウンターの上の、可愛い黄色いランプが優しい明かりを灯している。

「サンドイッチでどう? 直ぐ出来るし。」

「いいっすねー。」

美味そうなハムとセミハードチーズ、そしてトマトとレタス。
パンにマスタードとマヨネーズをたっぷり塗って。

ハイ、出来上がりですヨ。

「あー!」

「ゴメンな、勝手に。この子がお腹空いたっていうから。」

両手に乾いた服を持って戻ってきたトモくんは、
服をソファーに放り投げてカウンターへ駆け寄った。
まるで、腹を空かせた子犬ね。

「オレも食べたい!!」

「ハイハイハイ、作りますって。」

まるで、給食のオバサン状態か?

飢えた子犬2匹を目の前に。

餌付けだな、こりゃ。

「オレのトマト入れないでー。」

「ダメ?」

「ダメー！ー！」

「ハイハイ。」

可愛い。

この年頃って、こんな可愛いんだ。

最近、周りにはスレた奴しか居ないもんな。

若いフェロモン発散した奴との接点ないし。

あー、この若さにクラクラ。

「はい、どうぞ。」

『いったきまー！ー！ー！す♪』

二人声を揃えて、お行儀のよろしいことで。

ユウタ少年は、一心不乱にガツガツと貪り食いはじめ、

かたやトモ少年は、一口づつ味わって、至福の笑みをこぼす。

まったく、対照的な二人。

「うっめー！ー！」

「すげー、おいしいー♪」

サンドイッチでこんなに喜んでもらえるとは・・・

うん、嬉しいかな、こんなもの。

少しばかり幸福感に浸っているこの感じ、悪くないな。

でも・・・

すぐに心の中には、外の嵐のような冷たい感じが甦る。

拭い去れないこの感覚が、喉元まで込み上げる。

オレは、そっと目を閉じてやり過ごすだけだ。

「ハルキさん、今日、泊まってけば？」

「え？」

口の端にマヨネーズを付けた2匹の子犬。

キラキラした瞳で、真っ直ぐにオレを見つめる。

その真っ直ぐさに、とても戸惑ってしまっただぞ、大人は。フツ、泊まれって言うか？

見ず知らずの、赤の他人に。

見るからにヤバそうなオレに・・・

「さっき、親から電話があって、今日は帰れなくなったって。」

「なんでよ、トモ。」

「店、雨漏りしてて、店に泊まるって。オマエも泊まるだろ？」

「泊まる。」

何が楽しくて、子犬んちに泊まんなきゃいけねーんだ。

他に楽しい事はきっとアルはず。

このヌルイ感じに流されそうになる自分は・・・ダメだろ。

「いや、悪いし、オレは帰るよ。」

『えーーーーーーー！』

乾いた服に着替えている間も、熱い視線が投げられて、タジタジだ。

「まじ、帰るって。」

そう言った、その時、

バリバリバリと、激しい雷鳴が空気を揺らし

瞬間、雷鳴が夜空を明るく走りぬけた。

と、その直後に・・・

『あ!』

街中が一瞬にして暗闇に包まれた。

一瞬、何も見えなくなった部屋の中で、

オレの大きな溜息だけが妙に大きく響く・・・

部屋を浮かび上がらすのに十分な閃光が

雷鳴と共に闇夜に走っているこの状態で、帰れるか？

「ねー、オレたちのこと放って帰るの？」

ユウタが、無邪気に笑ってオレに言った。

第6話

カミナリはゴロゴロいいながら、あっという間に遠ざかって行った。小雨になった空は、まるでオレの気持ちを表しているように感じる。シヨボイ。

停電はスグに復旧してしまった。

5分もしないうちに。

ツマンナイ。

ハルキさんは、やっぱり帰ると言うし、泊まるはずの、ユウタも帰るって。

ありえねーシィチュエーションで出会ってなんか感じてるのって、オレだけかな？
チラリと、その横顔を盗み見る。

「トモくん、悪かったね。」

「いえ・・・」

イカナイデヨ。

何でこんな気持ちになってんのかな、変だ。
初対面の人間なんだけど、妙な親近感。
雨宿り効果？

『オレ、一人でいられない。』なんて、絶対、言えない状況。
わかってんだろオレのこと、ユウタ！

「どうした、トモ？」

「別に。」

馬鹿っ顔下げて、ニヤニヤしながら覗き込むなって！
もー、さっさと帰れー行っちまえーこの薄情者！！

「アレー、何か怒ってる？もしかして、オレらが帰るからとか？？」
「ちげー！ーよ！」

わざとらしいヤツ。
知ってるクセに！

「もしかして、寂しいとか？ひとりで寝れないとか？？」
「違うって言うてんだろー、しつこいぞユウタ。」

あー、もー、頭くる、コイツ！
わかってんなら、泊まってけっての。
いじめか？これ。

ユウタは、小さな声でオレに耳打ちした。

『わりー、オレ、女との約束忘れてたんだー
9時に塾終わるから、迎えに行かなきゃなんねー』

コレかよ・・・ユウタ、お前はそーゆーとこだけマメなのね。
いいさ、親友より女だよな。

オレが寂しくて死んでも、お前は女とイチャつけるやつだよな。

「じゃあなー。」

「ああ、彼女にヨロシクー。」

ダハハ、とニヤけっぱなしのその緩んだ顔が、

激しくお前の馬鹿っぽさを強調してるぞ。
真面目な顔してればいい男なのにさあ。
女が絡むとコレだもんな。

「じゃ、ハルキさんも気をつけて、サヨナラー。」
「ありがとう、ユウタくん。」

ユウタは、時間を気にしながら
バタバタと騒々しく帰っていった。

あ、そうか、ハルキさんも帰るんだった・・・玄関まで見送ろう。

「あいつ、彼女と待ち合わせしてるの忘れてたみたいで。」
「だから慌ててたんだ、トモくん、彼女は？」

オレにそれを聞かないでくれる！
恨めしい。

「いないですから。」
「アハハ、ごめん。」

笑ってるし。

そりゃ、オレだって彼女くらい欲しい・・・
けど！

ユウタと一緒に居たら、誰だって・・・
見劣りするっての。

「トモくん、今日は本当にありがとう、助かったよ。
その・・・色々迷惑も掛けたみたいだし・・・。」

ハルキさんは、意外にも頬を赤らめた。

恥ずかしそう視線をそらして言う。

「迷惑って？」

「・・・あ、だから、その・・・風呂に入れてもらったり、洗濯してもらったり。」

実は、やな事あってさ、朝から飲んでて、このザマで・・・申し訳ない。」

あ・・・その事か・・・そうだった。

一緒に・・・お風呂入ったんだ。

なんかテンパってて、そんなこと考えもしなかった・・・のに。オレまで、恥ずかしくなっちゃったよー。

「顔、真っ赤だよ、トモくん。」

「スミマセン。」

クスクス笑いながら、ハルキさんがスグそばに立つ。

その薄い手が、オレの頭の上に優しく置かれた。
ドキン。

心臓が、一つ、大きく鼓動する。

「キミ、本当、いい子だね。」

「そ、そんな・・・」

子供扱いされたみたいだ。
傷つく。

「いい子」だなんて。

「んー、いい子ってのは子供扱いだよな・・・んー、でも、やっぱり、いい子だ。」

オレの視線に気が付いてか、言い直そうとするんだけど全然、上手なフォローになりませんから。

頭の上の手が下に降りた瞬間、寂しさが増す。

「それって、褒めてます?」

「褒めてる、褒めてる!」

そう言いながら、

テーブルに置いてあった酒の入った携帯ボトルを手に取ると、無造作に後ろポケットにねじ込んで、ニツコリと微笑みを投げた。帰るんだ。

「また、逢えるといいんだけど。」

「あの、ウチの店に来てください、そしたら、オレ、すぐ行きますから。」

何で、こんな必死に頼んでんだ、オレ・・・

「実はさ、オレの仕事場、お店の近くなんだ。

時間が出来たら、顔出すから。今日のお礼もしたいしね。」

「・・・いつ?」

何時って、そんなのわかんないだろ、オレ・・・

「じゃあ、明後日の夕方は?」

「行きます!」

やったー! また、逢える!!! ... 何か違うべ、オレ・・・
玄関先で、

いまだぐっしりとした、雨に濡れた靴に足を入れて、

ハルキさんは、少し照れたような顔で振り返って言った。

「なんかさ、オレ、キミのこと他人のように思えないんだよね・・・
なんでかな・・・可笑しいだろ、初めて逢ったのに。

ま、世話になったのもあるんだろうけど・・・

何、言ってるんだオレは・・・ゴメン・・・。」

「あ、あの、オレ・・・ハルキさんに逢えて良かった！って思ってた・・・。」

数秒の間。

互いに顔を見合わせて、ブハハと笑ったオレら。

良かった、ハルキさんもオレと同じこと感じてくれてたんだ。

なんで、こんなこと感じたんだか、自分でもわかんない。

運命の出会いって言葉で片付ける？

玄関を開けようと、ノブに手を掛けたハルキさんだったが、何かを思い出したかのように、いきなり振り向いた。

「ホント、ありがとな。」

大人の男の人の匂いって、こんな安心するんだ・・・

オレの身体は、その腕の中に優しく包み込まれていた。

ドキドキした数秒間に、すっかり思考回路が停止したみたい。

気が付けば、

エレベーターに乗り込むハルキさんの後姿に、手を振って見送っていた。

ノロノロとしか動かない脳みそ。

ソファーにぼんやり座ったまま、テレビの画面を見つめていた。テレビの笑い声だけが、妙に騒々しく部屋に響いている。

長い時間、こうしていた。

ハアーーーーー。

長いため息。

「お前、何ため息ついてんの？」

「ぶっはっ！！！！！」

ゆ、ゆ、ユウタが居るし！

なによ、いつ来たのよ！！

オレの真後ろに、いつものように居るユウタ。

「お前、カギ開けっ放しだぞー、あっぶねーなあー。」

「も、もどってきたの？」

ユウタは、ニヤッといやらしく笑った。

オレの隣にドスンと音をたてて、いつものように座るとわざとらしく小声で言ったりする。

『女がさー、言うのよ。』

ずっと抱きしめててーとかなんか。

オレだって、そう言われたらその気になるべ？

フーーーーーッ

「ダーーーーー！！！」

オレの耳に息吹きかけんな！キモイ！！」

ぶはははははは！

って機嫌良く笑ってさあ、ハイハイ、いいですこと！

ま、オレも似たような気分に浸ってた訳だし。

わからないでもない。

「オレがお前を見捨てる訳ないだろートモお、ちゃんと泊まるからさ。」

「う、うん。」

何も話していないのに、何でか、スゲー恥ずかしい。

何も知らないユウタなのに、まともに顔見れん・・・

フットした時にオレに触れるユウタの身体、その瞬間、

オレ、ハルキさんの匂いと、抱きしめられたアノ感触を思い出して
しまう。

誰かに抱きしめられたの・・・初めてだ・・・

カッターと顔が熱くなる。

「何、さっきから、トモ！」

ユウタが怪訝そうな顔つきで、ジッとコッチを見ている。

ヤッベー、なんか勘繰ってんなコイツ・・・

オレは、働かない脳みそで、必死で言い訳を考え始めた。

第7話

目が覚めると、いつもと変わらない気だるい自分に戻っていた。瞬間の、妙にくすぐったい気持ちは2度と戻っては来ない。つかの間の夢かな・・・それとも、何かの仕業？ 神様なんて信じちゃいけないど、頑張って生きてるオレへのご褒美かもしれない。んー、そんなに頑張ってるか？ 何かの気まぐれみたいなもんだな、きつと。

アレから外に出てすぐ、真っ先に思い付いた友だちに連絡してみた。そして運良くその家に転がり込むことが出来たオレは、やっぱりラッキー。知り合いの中で一番安全かつ、一番住み心地のイイ、人の暮らせる部屋へ。ばらく厄介になれたらイイんだけどねえ・・・今現在フリーなら置いてもらえるはず。

イイ香りのする布団の中で、グダグダになってる身体を伸ばす。ふかふかの布団、清潔なカバー、イイ香り付き。あー、なんか、健康に生きたい・・・とか無駄に思っちゃうワケ。

少し前から、シャワーの音が、聞こえていた。さっき起きる気配がしてたもんな・・・学校か？ それとも、バイトかな？ まだ7時半、オレにとっては早朝だし、もう一眠りしたい。そう思って寝返りをした、その時。

「ハルキ、オレ、学校行くからね。カギ、テーブルに置いとくからさあ。」

オマエ、しばらく居るつもりなんでしょ？」

「いいの？」

ミナミのそのありがたいお言葉に、ガバッと布団をはねのけた。きちんと片付いている部屋の中央に、バスタオル1枚という本来な

ら悩ましい姿で。彼女はニヤニヤと笑って、大きく頷いた。肩にかかった濡れた髪の毛の滴を、丁寧にタオルで拭きながら。

「今ならOK。まあ、別れたの1週間前だけどさあ。とりあえず、ハルキが女とどうにかなるまでは、居てもいいよ。オレも、一人じゃ寂しい時もあるから、男でも居ないよりはマシ。」

「マジ？助かるー。」

ミナミさまさま。持つべきものは、一人暮らしのマッソーな生活してる友だちかも。
でも・・・

「お、おまえ、それヤメロよ!!」

くしくもオレは、れっきとした男なわけだ！オマエの羞恥心の無さっていうか・・・まあ、ある意味仕方ないんだけど・・・オマエがいくら同性を主張したって、なにしたって、とにかく今は、目をそらすしかオレのとるべき術は無い。

「あははは！おもしろーい。」

しょーがねーヤツ！ダレカレ、見せ付けるわけじゃないんだろーけど、マジやべーだろ、その格好・・・男の前で、真っ裸になるな！オレの存在を思いっきり無視して、裸体で歩き回っている。

「ミナミー、いくら中身が男でも、身体は女なんだからな。フツの男なら、襲ってもいいですか？ってなるってば。」

「そう？ココ、自分のウチだし。」

始末悪いー！

身体は極上の女で、中身が最低な男ぶってんだもん。いや、精神、脳みそは男なワケであるから・・・ややこしい。理解が無いってワケじゃないけど、やっぱり理解に苦しむ事もある。

「別にオレは、この身体がキライじゃないよ、そんな悪くないし。それに、これから使い方によっては、上手く生きていける訳じゃん。だから、お手入れもしてるし、大切にもしてるし。」

「ハイハイ、わかりました。いいから、早く着替えてよ!」

コレだよー、ここは安全で居心地いいけど・・・すっかり忘れてたさあー、ミナミの中身が男だってこと。

オレ自身が混乱してるし。ミナミから誘ってくることは、まず100%ありえないけれど、オレがその肢体の誘惑を否定し続ける努力は、相当なもんだろ。

「ハルキー、今、仕事してんの?」

「んー、銀行の裏手にショットバーあるだろ、そこ。そろそろ3ヶ月目。昼と夜逆転してんだよな!。」

ああ、といった感じでヤツはカガミ越しに頷いた。カガミの中は、女子大生の姿。絶対、モテててるハズなんだ。性格も悪くないし。

「学校行く時は化粧してんだ。」

「そーよ、可愛い方が女の子が寄ってくるの。」

マスカラを丁寧に塗る後姿に、目が引き寄せられた。オレの彼女だっけと同じことするのに、妙に鮮明な感覚。

「男も寄ってくるだろ?」

「まー、オイシイとこだけ頂いてますから♪」

オイシイとこだけって・・・どんな所だよ。正直、オレから見た感想は・・・マジ可愛い。オレの視線に気づいてか、ヤツの頬が少し染まった気がする。

「ねえ、ハルキ、大学戻ったら？」

「そんな気ありませえーん。」

冗談めかして言ったけれど、本心。

去年から休学中の大学に、今更、未練は無い。そもそも、大学に行った理由さえも不純なんだから。そうだ・・・何かがしたくて入ったわけでもないし、期待に応えただけの話。ただし、そんな期待に一生応えてやれるほど、オレは優秀じゃない。

「じゃ、行くワ。あとは、適当にやってて。」

「了解、いつてらあ」

細いストライプのワンピースの上に、オフホワイトのカーデを肩に掛けたシンプルな姿は、あまたの男ばかりでなく、多くの人の目を引くに違いない。オレたちが良く遊んでいた頃・・・ミナミが大学に入る前までの、少年のような姿はそこには見当たらない。

ミナミは、爽やかな微笑みを浮かべ、手を振って出て行った。

主が居なくなった部屋は、急に元氣なく静まりかえった気がした。起き出す気力も無く、ふかふかの布団に包まって目を閉じる。もう一眠り・・・瞼は重く、勝手に視界をふさいでしまった。

真っ暗になった頭の中に、僅かな灯りがともった。少年の話し声が、微かに聞こえる。

何？何て？『あえてよかった』・・・オレも逢えて良かったよ。

何故だろう、何 がそうさせるのかな・・・キミのその初々しい若さに、嫉妬している自分がいるから？

自問自答を繰り返しているうちに、眠りの闇に落ちていた。思い出すんだ、胸の中に暖かいものが流れている感覚。

何故だか、キミと話していると、胸の奥の方を感じるんだ。

ずっと昔の、チクチクとした疼きを。

第8話

昨日といい、今日といい、ユウタのオレを見る目つきが変だ。一昨日の夜だって、寝るまでしつこく追及してきやがって・・・本当に何も無いんだから、仕方ないべ！

今日は、ハルキさんと待ち合わせの日。

朝からソワソワ落ち着かないのは、自分でもよくわかってる。わかってるから、尚更、不自然になってしまい・・・がぜん、ユウタの監視の目も厳しい訳で。

「ぜーったい、変。オマエ、絶対、何か隠してるしー。」

「はあ？ いつも一緒にいんのに、どうやって隠し事作れる訳？」

考え込む馬鹿がココにいる。勝手に無い脳みそで考えてろ、静かで丁度いいや。今のうちに、英語の宿題のノート写しとこーと。

「わかった！ トモ、オマエ、女が出来たべ？」

「出来てない。」

あんまり単純な発想なんて、キツパリ断言したコツチも気持ちいいほんと、こいつのカラッポの頭には何が詰まってるんだか・・・単純過ぎて、逆に羨ましくなる。それに比べて、このオレはどうだ？ いつも余計な事ばっか思い巡らして、結局、タイミングを逃す。

いい事を思いついた時の・・・大概悪い事なんだけど、ニヤリとした笑みを満面に浮かべ、ワザとらしく小声で耳打ちした。

「トモ、好きなヤツが出来たんだろ・・・女じゃなくて、男だ！」

「ば、馬鹿、何言ってるの!!」

してやったりと言うように、得意げなその顔は何なんだよ！
ムカつくー。

ユウタは、オレの性格を誰よりも熟知しているし、オレもユウタの事は、ユウタ自身よりも知っている。

最悪だ、コイツ・・・

「なるほどねー、アイツかあ。なるほどーお。」

「勝手に解決しないでくれる、そんなじゃないんだから。」

「自分から認めてるー。」

「・・・・チェ」

自爆。

自分でもワケわかんないのに、ユウタに決め付けられてやな感じだ。ただ、また逢いたいだけ。放っておけない、そんな気がして・・・公園でずーっと雨宿りしてたとき、寂しそうな瞳が見えたから。

「オレも認めてやるよ、アイツがカッコイイってことは。でも、童貞は女に捧げろよな、男ってのはヤバイベ。」

「なんで、ソツチの話になってんだよ。」

くっそー、自分が先に捨てたからってエラそうに、腐れチン！レナ先輩に、殆ど犯されて喪失したんじゃないかった？泣きながらオレの布団に潜り込んで来たのは、誰だっけなー。

「実は、今日会う約束してんだ、ウチの店で。」

「まじ？もーヤル覚悟なんだ！」

ほんと、馬鹿！

ユウタの頭の中って、女とHでグルグル回ってんだろ。今の彼女、付き合って1週間だけど、すでに頂いてんのか？あー、オレの頭の中もグルグルしてきた。

「なートモ、アイツ、マジヤバクね？」

「なんで？」

へー、珍しい事を言ったもんだ。

変な大人の毒牙にかかりそうな親友を、少しでも心配してるわけか？

「だって、目がイツってね？」

「イツてないよ。ハルキさんは、イイ人だって思う。」

ユウタだって、本心でそう言ってるわけじゃない。得体の知れない男に、用心深くなっているだけだ。そうだ、意外にユウタは人見知りをするタチだから。

「ふーん。」

そう返事をしたヤツの視線は、廊下を通る女の子に向けられている。特にスカートの裾の方かな・・・ああ、早く視線を外した方がいいぞ、ユウタ・・・

「ユーくん、どこ見てるの？」

「あ、サキちゃあーん、あと少しで一緒に帰れるねー。」

「もー、他の女の子見てたあ！」

「見てないって！な、トモ！！！」

「見てたあ、絶対、見てたもん！！！」

「オレがサキちゃん以外の女に興味があるって思う？」

「でも、絶対、見てたもん!!」

背後に迫っていた、今カノの存在に気が付きもせず、鼻の下伸ばしきってんだから、たいしたもんだよ。ハイハイ、勝手に痴話喧嘩でも何でもして下さい。

「先生、来ちゃったから、サキちゃん、クラスに戻って。」

「いい、帰りは一緒に帰るのよ!」

こわーーーーい、女ってどうしてこんなに独占欲が強いんだか。

男がすこしでも他の女に興味を示そうモンなら、嫉妬心に支配されちゃって。あんなに可愛い顔なのに、一瞬にして般若だ。

オレは、これ以上の修羅場な状況を何度も見せ付けられてるからかな、付き合いたいとか、今すぐ女がほしいーとか思わなくなってる。でも、憧れてもいるんだけど。

放課後、ユウタは、約束通り素早く彼女に連れ去られた。

オレは何の気兼ねも無く、店に行くことが出来る。けど、店が近くなるにつれ、変な緊張感に包まれていった。

鼓動が他の人にも聞こえるんじゃないかって、胸を押さえたりしてもし、来なかったら? まだ、4時前だもん・・・来てるはず無いけど。

さっきまで足早に歩いていたはずなのに、銀行の角を曲がった途端、自分の両脚は、まるで鉛のように重く、

思ったように、つま先が前に出なくなってしまった。

緊張でコメカミが痙攣する。

「・・・あ。」

今、目の前で、店の中に入っていった男性客。

間違えなく、ハルキさんだ！

来たんだ！

歩道に埋まっていきそうな勢いだった脚なのに、それが、あつという間に横断歩道を渡ってしまっていた。

「ハルキさん！」

レジ前にスッと立ったハルキさんの姿に、オレの胸が高鳴る。

ゆっくりとコッチに振り向いた横顔は、一昨日の泥酔した男じやない。優雅な空気を身にまとった貴族のようで・・・まったく知らない人のよう。

少し怖いくらいだ。

「やあ。」

でも、微笑んだその瞳は、暖かな優しい色をたたえ、ただオレのこ
とを、迎え入れてくれていた。

息が詰まってしまうくらい、ドキドキと胸が締め付けられる。

一体、どうしてしまったんだろう。わかってる、わかってるさ、ハ
ルキさん・・・スゴク素敵なんだ。

「知り合い？」

タイミングの悪い間の抜けたパパの声がオレに向けられても、なん
だか金縛りにあったように身動きが出来ないまま、オレは頷いただ
け。

また、逢えた！約束通り、来てくれた！

それだけで、胸が一杯になって・・・今にもオレは、泣き出しそうになっていた。

第9話

ただ、ただ、まぶしかった。

駆け込んできたキミの背後から差し込んだ光りが、キラキラとキミの姿を形作って・・・薄暗い視界の中に、突然舞い降りた神の使いのように見えた。・・・ん、どうかしてんな、オレ。

カレは、恥らうような、ためらうような、そんな色を、瞳に浮かべて不安げに立ち尽くした。

人当たりの良さそうな彼のお母さんにすすめられ、店の奥のこじんまりとしたソファ―席に案内された。

程よく沈み込むスプリングと座り心地、何気に気に入ってしまう。

この席がちょうど曲がって奥まっていたから、カレの両親の視線や、他の客の視線から隔絶されている。

そして、ココだけが静かな時間が流れている気がした。

カフェラテのカップを注意深く口にする、スチームドミルクの泡のキメ細やかさに、改めて驚く・・・そして、しっかりとしたエスプレッソの風味にも。ああ、やっぱり、ココのは美味しい。

「あの・・・迷惑ですか？」

「え？何が？」

うつむいたまま、上目使いで目の前の男を見る少年の姿。

コレってオレが、なんか悪者って感じしねえ？説教ってか、何か悪知恵でも授けてる感じ。

「いつも思うんだけど・・・美味しいね、キミンチのカフェラテ。」

「あ、ありがとうございます。オレが生まれる前の話ですけど、パ・

・父さんと母さん、イタリアで何年か習ってきたって言うてました。」

本格的なカフェだったんだ。

こんな所にあるってこと自体が、意外。どの店よりも、高そうなマシンが鎮座してるワケでもないのに。コーヒ―豆のローストされた濃厚な香りが、店主のこだわりの表れなのかな。

「だから、美味いんだね。」

「あら、ありがとう。」

トモくんのお母さんは、ニツコリと微笑んでジュースをテーブルに置いた。

そして、視線をオレに向ける。値踏みされているのか、それとも、好奇心なのか・・・その優しい瞳が何を思っているのかは、うかがい知れない。

「いつも思ってたんです、他のとは違うなって。」

「あら、前にも？わかってくれるお客様が居て嬉しいわ。」

彼女は息子とは正反対に、比較的積極的な感じを受けた。でも、その瞳から受ける印象は、まったく同じ。

トモくんの瞳は、彼女の瞳だ。

真っ直ぐにオレに向けられた彼女の視線に、少したじろいでいた。

そりゃそーだ、こんなナリの見ず知らずの男が、自分の可愛い息子と知り合いだなんて、親としては見過ごせない。

「マ・・・母さん、向こう行ってくれる？話しが出来ないからさあ。」

「わかったわよー。」

うつとうしい様子で母親を追い払った少年の顔は、なんだか、はがゆいくらいに若々しくて、妙に可愛らしい。

オレもこんな時期があったか？・・・無いな。スーっと、首筋に冷たい風が吹いた気がした。

「親なら心配して当然だろ、怪しい男と知り合いだってだけで十分に。」

「ハルキさんは、怪しくなんてありません！」

そうか？十分、普通なら十分怪しいヤツだろー。見るからに、夜のお仕事って感じだしな。

「ありがとう、そう言ってくれるのは、キミだけだよ。」

「だから・・・怪しいって思ってたら、また逢いたいなんて思わない！」

・・・・・・赤面するようなこと、ストレートに言うなよ。

「オレも、なんでかな・・・キミとまた話したいと思ったんだ。何故だかわからないけど、ココがそう言うんだよな。」

と、気障っぽく親指で自分の胸を指す。

そして、正面、互いに視線がバシッと合って、ニヤリと意味ありげに笑いあった。

まったく意味なんて無かったんだけどね、勝手に顔の筋肉が動いていた。

二人の間には、余計な言葉は要らないようだ。

気持ちりが混ざり合うような、不思議な感覚がオレを襲う。

「オレ、偶然じゃなくて必然だって思ってる。」

「というところ？」

「ハルキさんと出逢ったのは、きっと決められてたんじゃないかって。」

「運命ってこと？」

「ウン」と瞳を輝かせて大きく頷けるキミの純粹さ、ただ、ただ、眩しい。その眩しい輝きに引き寄せられてしまったオレは、自分の闇に恐怖する。ああ、この輝きで満たされたなら、オレは変われるのかもしれない。

でも……

酷く冷たい心臓の鼓動が、トクトクと胸の奥へと響いていった。

第10話

オレの何気なく無駄に流れ過ぎている毎日。周りを見ながらゆつくり進むのも悪くないように思えてきた。

無意味でくだらなくて退屈で怠惰な生活を、改めて味わうのもなかなか面白いかもしれないな。

何か得体の知れない冷ややかな感情が、この胸の中に今も残っているけれど。

半ば強引にミナミの部屋に転がり込んで、もう2ヶ月が経った。女とは別れたし、ミナミに彼女が出来る気配も無い。夜の仕事を辞めたから、新しく部屋を借りる金も無し、目に見えて収入が減ったのが痛い・・・ああ、なんかまた、ヒモ状態だ。

おっと！

手にしたグラスを落としそうになって、いささか焦る。

目の前の悪戯っ子二人に、クスクスと笑われた。

まあ、オレ自身一番驚いているのが、こうしてカフェの内側に立っていることかな。

まさか、こんな展開になろうとは・・・

「そっちが終わったら、マシンの操作のオサライするから。」

「はい、マスター。」

このオレが、マーサでお世話になることになってしまったなんて。何かの縁？良縁になる事を願っている。

それは、たった2週間前の話で、すっかり馴染みになったトモくん

のお父さんと、世間話をしていた時だ。

「ハルキくん、誰かいらないかな？バリスタの仕事したいって子。」

「ココの話ですか？」

マスターは、大きく頷いた。

『オマエ、やらないか？』って、その瞳が言っているように見えた。いや、確実にオレに言ってるんだ。今の仕事を換えようか……って話を昨日したばかり。

「オレが、1から仕込んで一人前にしてやるから。」

「……って、ソレ、オレに言ってますか？」

『そうだ、オマエだ、オマエに言ってるんだ！』というような調子で、『がははは……』と、よく響く大きな声で笑った。

「どうだ、やってみないか？責任もって教えるから。」

その頼もしい眼差しは、オレの気持ちを揺さぶる。こんなにも力のある瞳で見つめられたら……この人ならきつと……導いてくれるに違いない。胸が高鳴り、頭の中は白くかすみ始める。

まさか、オレがココで働くのか？

バーテンダーからバリスタに転身？

マジで??

サービス業、キライじゃないけど……オレに出来るか？

あの時、勝手に動いた口は、いい加減なくらい気前のいい返事をした。

『ええ、是非!!』……どうかしてるぞ、オレ。……すぐさま

後悔が押し寄せていたのに。

そして、2週間があつという間に過ぎて・・・アハハ、格好だけは一人前ですから。

「なんですか、二人でニヤニヤして？」

「べつにーい、ウチの親に捕まったなあーって思つて。」

学校帰りに必ず店に顔を出すようになった二人が、ニヤニヤしながらストローをくわえて、カウンターに肘をついている。

捕まったっなんて人疑義の悪い事を・・・

「やめてよー、せっかく見つけた貴重な人材なのにー。」

テーブルを片付けながら、マダムが愉快そうに口を挟む。

まったく店に寄り付かなかった息子が、しょっちゅう顔を出すようになったのが、嬉しいのかもしれない。

家族の和やかな空氣に、多少の居心地の悪さも感じながら、そのうち、違和感無く存在してるはずの自分を想う。いつのことになるやら・・・

マスターの淹れたラテには到底かなわないけれど、そこそこ見た目に美しいラテを淹れられるようになったのは、先週。今週はずっとエスプレッソと格闘している。その間拔けな様子を、大笑いながらこの少年二人が見ているんだ。

なかなか手厳しいご意見に、大人のオレが情けなくもなる。こんなに自分が不器用だったなんて、思ってもみなかった。

「ハルキさん、ため息つかないでよ。オジサン、誰よりも丁寧に教えてるぜ、な、トモ。」

「珍しく本当。よっぽど気に入られたんだーハルキさん。きつと一

生、放してくれないと思うよー。パパ、執念深いから。」

オイオイ、怖いこと言うなよ。オレは、そんなに有能なヤツじゃないんだから。でも、嬉しいような痒いこの感じも悪くない。

こうしていると時折、トモくんと視線がぶつかる。お互いにニヤリと笑って、視線を外すことにも慣れた。

キミが運んできてくれた、新たな生活を大切にしたいと思う。いつまでも、こうして自分を感じていられるこの場所を。嫌いだった自分を、少し受け入れられそう・・・そうなんだ、変えたいんだ、自分を。

なぜ、自分自身を嫌悪しているのか、オレ自身よくわからないでいる。その嫌悪感が、この胸の奥底の冷たく大きな塊から発せられているものだということは知っていた。濃い霧に閉ざされた記憶に原因があるということも・・・

この手に掴みかけてはすり抜けて行く淡い幸福感、いつもオレに残されるのは・・・

「ハルキさん、お客さん！」トモくんの声に、ハッと我に返る。

不思議そうな二人の視線に戸惑いながら、オレは頭を振って仕事を続けた。

第11話

来年は高校受験なのに、何一つとして決まってるないオレ。てゆうか、決められないのが正直なところなんだよね。ユウタは、ずっと前から近くの高校に決めてる。オレ的にはどうよ、ソコ。アイツみたいにしてスキーの才能があるわけじゃないし、かといって、ここまできれいになったスキーを捨てるのも勿体ないし。だからって高校入って部活して、スキーにどっぷり生活もヤだし。

「はあー。」

「ん、どうしたの？」

オレのため息を聞きつけてか、ハルキさんが擦り寄ってくる。最近ではホールも出たり、レジ閉めやらされたりして、ウチの親にいいようにコキ使われてる気もするんだけど。

「色々決めなきゃなーって。」

「進学のこと？」

「うーん、そんな感じ。」

頭の中ってゆうか胸の中のモヤモヤが、一気に濃度を増し始めたみたいだった。何をしてもなんか面白くないってゆうか、ハジケらんねーって感じ。学校終わって店でこうやってダラダラして、緩んでるのが唯一の癒し？ハルキさん効果か・・・

「オレが言うのもなんだけど、勉強って今しか出来ないじゃない。無理矢理、無我夢中でって意味じゃないけどさ、やった事はやった分だけ残るからね。」

「うん・・・わかってんだけど、ピンとこないってゆうか。」
ちよつと意地悪く笑ってオレの髪の毛をクシャクシャに乱すと、自分の腕時計をチラリと見て言った。

「早番なんだ、メシでも食いに行かない？」

「マジ？」

急な誘いに驚いて、ポカンと口を開けて見上げちゃったじゃん。

「ご馳走しますよ、坊ちゃん。」

「もー、それ止めてよー、トモでいいってば！」

最近、何かにつけて坊ちゃんってカラかってさあー。痒いって!! オレはわざと不機嫌にハルキさんを睨みつけた。

「5時に仕事が終わりましたらお迎えに参りますので、どうかお先にご自宅でお召し替えいただけますでしょうか? トモ。」

「もー、だからソレ・・・今、トモって言ったよね?」

くすぐったい。

自分で呼んでって頼んどくせに、呼ばれるとこんなにも、くすぐったい。思わず首筋をかきむしってしまった。

「アハハ、ほら、迎えに行くから先帰って着替えておいで。」

「うん。」

ちよつと嬉しい・・・ううん、スゲー嬉しい。ハルキさんにメシ食いに誘われたあ、やったね。久しぶりにウキウキ? こんなオレってどうよ、いいよね。いつもなら家まで15分かかる道のりを、10分で帰ってきちゃうのも、いいでしょ。

「ママー、今日、メシいらないー。ハルキさんと外で食べてくるから。」

「えー、そうなの? 作り始めちゃったのに。」

キッチンから、ママの返事が帰ってくる。でも、怒ってないみたい。着替えていると、ママはニヤニヤしながら部屋のドアから顔だけ出した。

「悪い事、教わらないでよ。」

「もー、メシ食ってくるだけだってば！」

「そ、ならいいけどお。ハルくんにも念を押しとこーっと。」

「ママー、余計なこと言わないでよー。」

「ハイハイ。」

クスクス笑ってサッと顔を引っ込めたと思ったのに・・・

「ねー、そのシャツ格好悪い・・・アッチのプルオーバーのがイイわよ。」

袖を通そうとしていたチェックのシャツに嫌そうな顔で首を横に振ると、チェストから覗いていたオールド加工されたネイビーのシャツを指差した。もー、すぐチェック入れるんだから！

「自分の息子がそんなセンスだと思うと悲しいのよ！」

「わかったよー、もー、行つてよ。」

フンッと鼻息荒く眉を大げさに吊り上げてから、ママはドアをバタンと閉めた。過干渉なんじゃねーの、ウチのママって。

5時半近く、ハルキさんは約束通り迎えに来てくれた。

「ハルくん、ゴメンねー。でも助かるわ、子守してもらえると。」
「ママ！」

本当、やるなる。一言多いし、子ども扱いするし。

「遅くならないように帰ります。」

「いいわよ、少しぐらいなら遅くなっても。明日、学校休みだし。ハルくんなら安心してトモをお願いできるしね。」

「アハハ、そう言われちゃうと悪い事教えられないじゃないですか。」

「早く行こうー！！」

これ以上ココにいたら、ママの長話が始まっちゃうってば。オレは、ハルキさんの腕を引いてエレベーターに乗り込んだ。そう、明日は休みなんだよね。だから、ユウタは彼女とデートの最中。そして、明日は別の子と映画に行くんだって・・・ヤレヤレ。

「何、食べたい？」

いつもと同じスピードでエレベーターは降りているはずなのに、なんか、スローモーションかも。ガラスから差し込む夕日が、ハルキさんの顔を美しく彩っていた。

「トモ？」

「あ、ああ、何でも・・・いい。」

「だよなー、何処に行こう。」

少し考え込むように首を傾げた格好・・・その夕日がつけた陰影は、オレの胸にその姿を強烈に刻み込む。キレイ・・・、男の人をキレイ

イだなんて変だよね。それでも、思う、キレイだって。長いまつ毛が揺れ動いたびに、ドキリとして。

「すぐに、メシじゃなくてもいい？」

「う、うん、まだ腹減ってないし。」

「じゃ、少し遊んでから。」

チンっという安っぽいエレベーターの音と同時に開かれたドア。オレンジ色で染まったフロア。その光りの中へ、オレたちを進ませようとしてるよう。暖かく全てを清めてくれそうな、そんな夕日の光りに包まれて。

「行こうか。」

オレの背中を押すように、ハルキさんの手が優しく当てられた。オレはその顔を見上げ、互いに顔を見合わせながら、そのエレベーターをあとにした。

第12話

夕日に染まった街並みを誰かとうやって歩くの、久しぶりかもしれない。やっぱいいよね、誰かがソバに居てくれる、そんな安心感っていうか・・・和む。中学生の男の子とデートか、オレ的にも世間的にもイケナイってな。

ミナミに見つかったら、速攻、冷やかされる。いや、その前にウマソーとかなんとか言って、唾付けられるかもな。アイツもなかなか相手が出来ないし、それどころか最近、益々女に磨きを掛けてるところが怪しすぎる。絶対、なんか企んでるっぽいんだよね・・・まあ、そのお陰で追い出されずに居る訳で、もちろんオレらの関係も清いまま。ま、当然だけど。

「ハルキさん？」

「え？」

穢れを知らない純粋な瞳が、オレを不思議そうに見つめていた。

「どーしたの、ぼーっとして。」

「ん、なんでもない。んじゃ、ゲーセンでも行く？」

首を横に振って、ちよっと思案気に小首をかしげどこか遠くを見つめるような仕草に、オレの中で誰かのぼんやりとした影が重なった気がした途端、キュツと胸の真ん中に、いつもの痛みが走った。

「そうだ、連れてって欲しいところあんだけど。」

「どこ？」

瞳の中の輝きが増す瞬間って、こんな時なんだな・・・トモの瞳のキラキラが胸の痛みを拭ってくれた気がしている。ほら、もう痛んでいない。

「ヒルズの展望台。まだ行ってないんだよねー。あそこってテリトリ外だしさあ、ユウタと2人じゃさあ気分出ないし。彼女、出来そうもないし。」

「いいよ、行こう！」

「やった!!」

ジャンプして喜ぶなよ、ガキじゃあるまいし。あ、まだガキか・・・
そうなんだよな、この頃って、なんでもかんでも身体つかって表現
できる最後の時期って感じでさ。オレ自身は、っていうと、そんな
時期は自分から背を向けて・・・

「ほら、早くー。」

「んな、急がなくても逃げないって。」

展望台へのエレベーターへ飛び乗ったのはいいけれど、結構、高い
なあ・・・夕暮れ、昼と夜が交じり合う時間の美しい空。

「うわー、スゲー!! マジスゴクない、ハルキさん。」

「ホント、スゲーな。」

真下を見下ろしてキヤアキヤアとはしゃぐ姿に、オレの顔も自然に
ほころぶ。こんなに喜んでもらえるなら、子守も悪くないな。

けれど、そんな楽しい気持ちが一瞬に凍てついた、オレの名を呼ぶ
声に・・・

「ハルキ?」

「・・・お姉。」

背後からのその声は、オレの思考を麻痺させた。

振り向くと、目を疑うほどに夜に彩られた女が凜と立っていた。昔
と変わらない、強い意志を秘めた瞳のままに。

「久しぶりね、元気?」

「ああ、お姉は?」

「この通り、クラブで働いてるの。」

そう言って、小さなハンドバッグから名刺を差し出した。「クラブ
真子 フユキ」そんな事が書かれた名刺を。

「春、夏、秋、ときたら冬じゃない。」

クスクスと可笑しくも無いのに笑う姿が不快だった。

何年ぶりに再会した実の姉の変貌よりも、姉自身に会ってしまっ
た事へのショックがオレを襲う。のど元に、大きな塊が込み上げる・

・

「大学は？」

「辞めるつもり。」

搾り出した声は、ひどく擦れている。

「勿体無い、せっかく入ったんだから卒業しなさい。」

「・・・合わないんだ。」

話すたびに、小さく消え入りそうな声だ。

「そう・・・ところで、あのこは？」

「働いてるとこのオーナーの息子。」

「ナツキと同じくらいじゃない？」

「・・・。」

ナツキ・・・オレの弟。

そう、今じゃトモと同じ年になったはず。

6歳から会ってはいない弟だ。

「あの子も、すっかり元気よ。そのうち3人で会いましょう。連絡先、教えて欲しいわ。」

オレは店のカードを財布から引っ張り出して、姉のチアキに手渡した。

「そう、ここで・・・近いうちに顔を出すわね。」

「ああ。」

トイレから戻ってきた初老の男がソバに來ると、チアキは、何も言わず表情も変えずに、クルリと踵を返して去っていった。

まさか、こんなところで再会するなんて・・・ひどく愚かな自分を改めて感じはじめていた。

小刻みに震えていた右手を隠すように、オレはポケットに両手を突っ込む。

無邪気に夜景を見つめるキミの横顔だけが、唯一の慰めだった。

第13話

空が、闇に落ちる事はなかった。

下からの強烈なライトの群れに、夜空がボンヤリと漂っている感じがする。足元を流れている車の列や、遠くに見える高層ビルなんかも、絵に描いたようで現実感がない。こうやって、隣にいるハルキさんも幻だったりして、なんてチラリと横を見る。

「どうしたの？」

「ん？」

暗い顔で、ジッと何かを睨んでいた。

何か・・・目の前にあるものじゃない、何かを。スゴイ悲しそうな横顔に、胸が騒ぐ。

「なんか、顔色悪いけど・・・」

「そう？ 腹が減って血糖値下がってんだよ、さ、メシ食いにいかない？」

本当にそう？

変に明るくされると、益々浮かない理由が知りたくなる。

子供のオレに、何も話してはくれないって、わかってるけど・・・

「何食べたい？」

「んー、ラーメン！！」

「マジで？」

ニツコリ笑って、大きく頷くしかないじゃない。

ヤレヤレって、さっきよりはずっとマシな顔になったね。

フロアーは、観光客からカップルに変わってきていた。子供のオレ的には、ちょっと眼のやり場に困ったりし始めてるし。オレら、他人から見たら、きつと兄弟とかそんな感じに見るのかな？

「じゃあ、行こうか。」

そう言ってエレベーターに乗ったハルキさん様子・・・ポケットに手をつっ込んで、壁に寄りかかって、うつむき加減で、オレのこと

なんて見ないし、オレ、何かしたかな？はしやぎすぎたくらいで、怒る訳ないし。

先に行くハルキさんの背中を見つめながら、何か言葉を掛けたかったけれど・・・見つからない・・・オレの方が段々と悲しくなってくる、どうしたらいいんだろ、ズッシリと足取りも重くなる。

「トモ？なに、具合悪い？」

「ち、違うよー。」

オレは足を止めて、すぐ近くのベンチに腰を下ろした。会社帰りの人たちが、足早に通り過ぎる。タクシーから降りてくる、楽しげな人たち。写真を撮る観光客。

「飲んで。」

「うん。」

冷たいジュースを手渡たされ、ヒドク乾いた喉を一気に潤す。

オレも糖分足りてないのかも・・・頭の中がスッキリしてきた。

「あのさ、何かあったの？」

「え？」

驚いた声で、ハルキさんが聞き返した。

「オレ、それが気になってんだけど。展望台で急に元氣無くなったでしょ、ハルキさん。」

「ああ・・・ゴメン。さっきさ、会いたくないヤツに会っちゃって、それで。」

とてもキレイな女の人と話していたっけ。離れたオレのところにも、香水の香りがしてくるような錯覚。きっとあの女の人の事なんだろ
うな・・・

「あのスゲーキレイな女の人？」

「そ、あの人。」

やっぱり。

素直に教えてくれたこと、ちょっと意外だった。

適当に誤魔化されるのかなって思ってたのに、ちゃんと話してくれた。

嬉しい。

「大キライな人？」

「キライとかスキとかじゃなくて、出来れば関わりたくない人。」
その辺になると、オレには難しいかも。でもそれ以上聞くのは悪い
気がして、何も言わなかった。カップの中の氷をストローでかき混
ぜながら、次の言葉を考えていた。

「10年ぶりに会ってさ、もービックリ。心臓止まるかと思った。」
「10年？」

「10年も会ってないのに、良くわかったなーって感じ。」
と、厭されたような口ぶりで、面倒臭そうに頭を掻いた。その仕草
が男っぽくて、それをじっと見つめてしまった。10年も会わな
かった人に会うってどんな感じなんだろう。10年前、オレ4歳だも
んな、想像つかないや。

いつものように笑うハルキさんだけど、きつと無理に笑ってくれ
てるんだろうな。だって、あんな悲しげな顔、出逢った時に感じた
と同じもの、久しぶりに見たんだ。オレ自身が何故か緊張している、
何かが襲ってきそうな不安みたいなので。

「トモが暗い顔しないの、ほらほら、ラーメン食いに行こ！」
ハルキさんの薄い手のひらと細い指が、オレの手首をガツシリと掴
んでグイッと引っ張った。立ち上がると、もう脚は重くない、頭も
スツキリ、お腹もペコペコ。

「オレ、大盛にしよーっと。」

「ギョーザとライスも付けてやるよ。」

本当、オレが暗かったら、ウザイだけだもん。ラーメン食べて、気
合いれよーっと。

第14話

ラーメンがどんな味だったのか、トモと何の話をしたのか、だらしないオレは殆ど憶えていなかった。トモに申し訳ない気持ち。あんなに嬉しそうにしてたのに、上の空で・・・街の夜景も急に輝きを失っていった、あの感覚。記憶から消してしまいたい家族との確執は、オレの胸を恐ろしい勢いで押し潰していく。

「ハルキ、何かあった？」

テーブルいっぱい資料を広げパソコンを睨んでいたミナミが、画面から目を離さずにボソつと言った。

「んー、ちょっとね。」

「ハルがさー、そんな風な時は、大概アノことなんだよねー。」

お見通しか・・・観てもいないテレビの画面を見つめながら、大きなため息が口から漏れる。

「夕方、お姉に会った。」

「マジ？」

キーを叩く音が止む。

怪訝な顔つきで、ミナミはオレを見つめた。アノ事情を知る唯一の親友は、この痛みをスグに感じ取っている。

「マジ。オーナーの子とさ、ヒルズ行ったら居てさ。」

「そっか、イタイね、それ。」

ソファーに重い身体を横にして脚を伸ばすと、ミナミはそつとオレの頭を自分のヒザの上に乗せ、慰めるように優しくこの髪を撫で始めた。

「いつぶり？」

「10年かな。」

「そんなになるんだ。」

また、重苦しいため息。何度大きく息をついても、胸にたまった塊は溶けてなくならず、質量を増していくみたい。最後に会ったのは

いつだろう、それも曖昧。オレは隔絶された状態で、何の不自由もなく暮らして、本当は家族の事なんて忘れていたんだ。

「けっこー、ショックデカイ。お袋の葬式の時、弟はチラっとは見たんだけどさ、お姉とは全然だったから嘘みたいで。」

「そのうち、もっと先かもしれないけど、ケジメつける時が来るんじゃない？」

「うん、そう思う。このままじゃないってのも。」

曖昧にしか思い出せないけれど、悲惨だった子供の頃を思い出すだけでノドに酸っぱいものが込み上げてくる。親父が女を作って家を出たことで母親はアルコールに溺れ、次第にその日の生活にも困るようになった。ありがちのコースだったけれど、まだ幼いオレには耐え難い苦痛でしかなかった。

弟の怪我をきっかけに、父方の祖父母にオレだけが引き取られた。母親は病院に入り、姉は父親に引き取られ、弟だけが、何故か施設に預けられた。家族がこうしてバラバラになった理由が何処にあるのか・・・どうして、こんなことになってしまったのか・・・わからない。いや、オレは知りたくなかった。

「ハル、目を背けるのは簡単だけど、それを貫くのは困難だからね。」

「おー、言うねー。」

ミナミは、フンと笑った。そうだ、コイツも案外苦労してるタイプの人間だった。オレと違うところは、あくまでも前向きで、快樂主義者だっつとこだな。

「他人がどうこう言っつて解決できる事じゃないし、自分でココンとこの痛みを受け入れないと始まんないからね。」

と、自分の胸を指差して、ミナミは笑った。ココンとこの痛み・・・この正体のわからない恐怖と不安。コレを受け入れるには、相当なもんだぞ、簡単に笑ってるけどさ。

「ま、しばらく苦しんでもいいんじゃない。」

「他人事だと思っつて、簡単にゆーなよ。」

「他人事だからねー。」

ヤツはオレの鼻をギュっつと摘み上げると、勢いよく立ち上がった。視界から消えた意地悪な天使は、また、忙しげにカタカタとキーボードを叩き始める。

「風呂入って、寝なよ。コッチは、徹夜だから。」

「徹夜？」

医学部に真面目に通っているミナミの姿に、心底感心していた。最初は冗談かと思っていたのに、本当に合格しやがった。狙いの国立を捨て、急に私立の医学部を受験するって言い出したときは冗談かと思ったのに。ヤツなりに、思惑があつてのことだろうけど・・・「助教授に虐められてんの、週末の学会に間に合うようにまとめろーってさ。」

「例のシツコイ女？」

前に話しに聞いた、35を過ぎた女の助教授を思い出す。付き合ってたっけ？

「そ、ちよつと冷たくしたらコレだもん。駆け引きを知らない女とは、付き合わない方がいいってことだね。」

「愛されてんのねーミナミさん。」

そんな露骨に嫌な顔をしなくても、オレは可笑しくなってクスクスと笑ってしまった。知らないうちに、ヤツのペースにのせられて、スツと気持ちは楽になっていた。これくらいなら、オレにだって受け入れられる。

ミナミの言うとおり、目を背けるのは簡単だ。けれど、その代償が大きい事に改めに思い知らされる。この痛み・・・貫くには、キツ過ぎる。

第15話

この前、一緒に出掛けて以来、ハルキさんの様子はおかしい。憂鬱そうな暗い顔が、話している間にも時折覗く。

オレなんかが立ち入っちゃいけない話だけど、やっぱり心配だよ。

前ほど行かなくなった店だけど、それでも、週に2回は顔を出していた。

それに最近、パパとママがなにやら画策してるみたいで、コワイんだよね。

夜中にボソボソ話し込んでたり、パソコンに向かってカチャカチャしてるかと

思えば、しょっちゅう、誰かと電話してたりして・・・ぜってー何かアル。

「トモー、今日、泊まってるいい？」

「いいけど、マジで泊まるんだろうなー。この前みたいに、夜中、出掛けるつもり？」

「ちゃんと泊まるって。たまにはトモくんの相手もしてあげないと、拗ねちゃうだろ。」

まったく子分扱いってゆーか、もー、頭撫でんのやめろっての！うぜー。

「ダレが拗ねるか！」

新しい彼女と楽しくやってるうちは、オレンチに寄り付かなくせして。

どういった風の吹き回しなんだか。先週だって、ウチに泊まるとか言って

結局、夜中に遊びにいちやうんだもんな、あきれるよ。

「ボクも寂しくって・・・」

「オマエ、また、振られた？」

ガクッと肩を落とすユウタの悲壮感にニヤニヤっと笑いが止まらない。

だから、朝から大人しかった訳か。

「性格の不一致。」

「性の不一致じゃないの？」

「あはは、そーともいう、マジメな子はダメねやっぱり。」

んだよ、大人ぶりやがって。

知ってんだぞー、ゴムの付け方コッソリ練習してんの。

まだ、1回もまともに使った試しが無いってこともね。

そんなユウタ情報は、ユウタの元カノが全部教えてくれる。

なんでかユウタと別れると、みんなオレに話に来るあたり、おかしくね？

「少し大人しくしたら？ シーズン入るし。」

「あ、そうだ、来週あたりニューモデル入るってよ、見にいかね？」

「いくいく！」

11月下旬には、1回行けるとイイんだけど。

ユウタに誘われて始めたスキーは、今年で4年目。

いい感じで上達してるけど、やっぱユウタにはかなわない。

あーあ、オレもユウタくらい愛嬌と度胸があったらなあ

少しは女の子にももてると思うんだよな。

学校が終わって、

家から新らしいソフトを持って来たのはいいけど、

1人でずーーとヤルの止めてくんね？

オレ、めっちゃヒマなんですけど。

マンガ読んじやったし、ゲームはユウタがやってるし。

店行って、ハルキさんと話してたほうが楽しいっての。

「なに、ため息ついてんの？」

「オマエがうらやましーって思ってる。」

大袈裟に驚いて見せなくってもいいてば、オレだって言った事に後悔してんだし。

「オマエ、ホントにそんなこと思ってるの？」

「うっせー。」

はい、はい、思ってますよ、出来ればユウタに生まれたかったて。オマエみたいに、自分に正直にストレートに行動できたらっていつも。

「オレは、オマエがうらやましい。」

「はぁ？」

今度は、オレが驚く番。

ゴメン、マジびっくりしてんですけど、オマエ、今なんてった？

「オマエの素直のことかさー・・・オマエ、よく自分の事やだって言うけどさ

オレ、オマエと居るとスゲー和むっーか、癒されるっーか、とにかく、オレは

オマエと居る時が一番ホっとする訳。

オンナと別れたら必ずオマエんとこに戻ってくるだろ、オレ。」

「それ、なんか、違うくないか？」

なんか、微妙に意味が違うと思うんですが・・・それ。

ゲームをするユウタの背中を、後ろのソファーに座って見つめていた。

ヤツはゲームをやめる気配など微塵も見せなかったけれど、その耳が、なぜか真っ赤になっている。自分の言った事が恥ずかしいって？

「とにかく、オレはオマエが好きなの。わかってる？」

「わかってるよー、オレだってキレイだったらユウタとツルまねー

し。」

何かを思い出したように、振り返ってギロリとオレを睨みながらユウタは言った。

「一つだけ気に入らねーことがある。」

「な、なによ。」

「元カノみんなが言うんだ。オレじゃなくて、やっぱトモと付き合いえば良かったって。」

マジっすか？

それって、本当ですか？

ひゃー、意外にオンナウケいいの？オレって。

ちよっと、ばら色な人生が目の前に浮かんできたりして。

「えー、マジ！なんで早く教えてくれねーのよ。」

「悔しーべ、オレよりオマエのがモテんの教えんの。」

何を！

オレの人生、彼女無しなんだぞー。

オマエと一緒に居たら、きっと一生彼女無しってビビってたんだからな。

何が、悔しいって？

んじゃー、今まで、ラブラブなオマエの姿見せ付けられてた、オレの立場は？

「ひっでー、オマエ、最悪、オレに彼女が出来ねえ理由、ぜってーオマエだ。」

「しゃーねーべ、オレのが先に仲良くなるんだから。」

ん？

オレが先に仲良くなるってどーゆーことよ。

オレにもチャンスがあったってこと？

「もしかして、オレを好きな子をユウタが、全部、食ってね？」

「そ、そ、そんなわけねーじゃん。オンナだって、好きだからオレ

と付き合うんだし」

あやしー、絶対にあやしすぎ。

なんか、隠してんな、ユウタのやつ。

「正直に言ってみ、怒らないから、ユウタくん。」

「な、なに、どうしたの？ トモ・・・」

体格じゃ敵わないのは知ってるけど、レスリング並にヤツの後ろから腕と脚を絡めて、ヤツの身体をしっかりロックしてやった。

「や、ヤメロヨー、死んじゃうじゃん、ゲーム！」

「白状せい、さもないと・・・はぁーあ。」

「んぁぁぁ、やめ、キモイいい」

わざと、ヤツの耳に熱い息を吹きかけてやった。

オレが知らないと思うか、オマエの弱点、感じるころってのを。

「で、どういうことかな。」

「んはぁ、な、な、なにがー。」

唇を耳に引っ付けて、ボソボソとわざと響くように低い声で言っ
あげる。

ユウタの身体が、ビクビクつと微かだけど跳ねている。

コイツ、ちょっと感じてんな。

「もしかしてー、女の子から相談受けてない？ オレってどんなー
？とか、

オレが好きな人ってダレー？とか、親友のユウタくんなら知ってる
でしょー？って。」

言葉を繋ぐ間に、意地悪く息を吐く振りをして吹きかけて。
その度に、小さく喘ぐような声を漏らすユウタが面白くて。

「んぁ、ともー、お願いーやめてよー、オレ・・・」

「白状したら止めてもいいよー、はぁぁー。」

しつこいくらいに、何度も息を吹きかけているうちに、ユウタの身体がビクビクっと今度は、はっきりと仰け反った。

「ああ、んあああ。ダメだー、オレ・・・マジで・・・

はああああトモー、ゴメン、スゲー感じちゃって、こんなん初めて。」

「感じてんのー？」

ユウタは恥ずかしそうに、でも、しっかりと頷いた。ちよっとおー、オレで感じちゃってどうよ？

そして、甘えるような声でお願いするんだ。

「トモー、自分でするからー、そうやってくっ付いてて。」

「マジかよー。」

服の上からでも、はっきりとわかるくらい反応してるユウタ自身。オマエってヤツは、盛りのついたお年頃っていうか・・・

「だって、ほらーこんなになっちゃってんだぞ。

こーしたのオメーだかな、責任あるべ！違う？」

んだよ、今度は脅しかよー。

「う・・・、くっ付いてるだけだかな。」

「ビタっとくっ付いとけよ。」

あああ、もー、なんだってんだよー。

何が悲しくて、ユウタの自己処理の手伝い？

その振動がオレに伝わってくるじゃん・・・

苦しい表情とは別に、その息遣いは潤んでいるみたい。

「トモお、もっと抱きしめてえ。」

「う、うん。」

オレよりも少し大きくて厚い胸板に回したこの腕にギュっと力を入れる。オレはユウタを背中からしっかりと抱きしめた。

チラリと視線に入るユウタのソコは、今にも弾けそうに濡れて、

ユウタは欲求に身を任せて、ただ激しくしごく。

「んああ、トモお、イキそう。」

「イケよ、いいから。」

そのままイカれてもかなわないし、オレは急いで

ユウタの先っぽにティッシュをあてがった、その途端、

ヤツの手がオレに重なって、放さない・・・

まったく・・・オレはナニか？

「トモお・・・イクう、あ、あ、あ、んあああああ。」

グツタリと身体をオレに預けて、ユウタは荒く息をする。

「トモオ、サイコー。」

「オレにサセンなつての！」

勢いよく立ち上がったもんから、ガスって大きな音を立ててユウタは床にぶっ倒れた。

「イテーーー、ナニすんだ、このー！せっかく余韻にひたってたのに。」

「トイレ！」

くそー、なんだよユウタのやつ、オレで、イキやがって。

あんなスゲー勃って、あんな顔でイかれたら、オレだって・・・

自分自身の熱くなった下半身を見られる前に、オレは急いでトイレに逃げ込んだ。

第16話

ずっとココに居座り続けているよどんだ霞み、晴れることなく濃度を増す。

気が付くと、重苦しい胸の上に手を置いて、何度も深い息をついていた。

そんなオレの様子を、チラチラとオーナーが見ている事もわかっている。

あの女が声を掛けてこなきゃ、こんなにイライラせずに済んだものを、

ふいにミナミのいった言葉が頭をよぎる・・・「貫くには辛すぎる」か。

アイツらしい言葉に苦笑してしまった。

「ハル、調子悪いなら上がっていいぞ。」

「だ、大丈夫っす。」

一段落ついた頃、ため息ばかりつくオレの様子を見かねたように、オーナーは言った。

返事をしたオレの手は、また胸の上に置かれていた事にも気が付いた。

「手が止まってるぞ」

「すみません・・・」

「何かあったか？」

「いえ、たいしたことは・・・」

その暖かい瞳に見つめられると、こうして胸に溜めているものを一気に吐き出してしまいたい、そういう衝動に駆られてしまう。

父親とそう変わらない年齢のこの人は、なぜにこうも人に優しいのか。

「店が終わったら、話がある」

「はあ」

クビって？素質無いから、今のうちに辞めとけって話か？
ハァーと、知らず知らずのため息が漏れていた。

何も考えないように仕事をこなしながらも、時折、止まる手。

財布の中に入っている、クラブの名刺を思い出しながら

今度、携帯に電話してみようか・・・と、考えるだけでも。

10時にはクローズ作業を終えると、オーナーと二人、店を出る。

近くの馴染みの居酒屋に入って、いつものカウンターではなく奥の座敷に落ち着いた。

ヤベェ、マジ、クビかも・・・

「最近どうだ、仕事は覚えたろ？」

「まあ、一通りは、覚えるには覚えましたが・・・」

目の前に出されたお通しを箸でつつきながら、オーナーを伺う。

何故だか話にくそうな、そんな顔つき・・・やっぱ、そう？

「オマエ、今、付き合ってる人とかいるのか？」

「な、なんですか、急に、いや居ないですけど、そんな気ないってゆーか」

「オンナの子と同棲してなかったか？」

ミナミのことか？

恐ろしく誤解ですから、オーナー！。

アイツは、ただの大家・・・ま、家賃払ってないけど・・・スマン。

「アレはマジメに友だちです、金無いから、居候してんですオレ。」
そうか、と笑って豆腐に箸をつけてながら訊く

「この仕事、どうだ？」

「どうだって言われても・・・」

少なくなつたグラスに、ビールを注ぎ足しながら言葉を選んでいた。

「嫌いじゃないです、好きだって胸張って言えませんが、もっと続けて、もっと技術を上げたいって思ってます。」

ウンウンと頷いて、注がれたビールを一口飲み込むと、テーブルの下のカバンの中から1冊のファイルを取り出した。

「コレは？」

手にとって表紙をめくると、「ハワイ・アラモアナショッピングセンター」

という文字が眼に入る。アラモアナの2階？ ディズニーストアの正面に

赤い印が付けてあって・・・

「出そうと思ってる、ハワイに。」

「店をですか？」

「ああ、完璧日本人狙いだけだね。」

ビールを一気に飲み干して、少年のように瞳を輝かせていた。

「隣、DKNYじゃないですか!!」

オイオイ、マジかよ、このオッサン。

オッサン、何、血迷ってんのー、2店目ハワイって。

「友だちが、ハワイで大きくコーヒー豆やってるんだ。」

それが意外に美味しくてね、少し前に扱い始めたヤツ評判いいだろ、あのマメあれだよ。

前からしつこく、出せ出せって誘われてたんだ。」

「マジっすか？」

驚いているオレを尻目に、手酌でビールを飲みながら、また頷く。来年、6月オープンって・・・コッチの店はどーするんですか!! オレの血の気が失せていく。

「年が開けたら、しばらくオープン準備にハワイに行ってこようと

思う。

その分ハルには負担が掛かってしまうけど・・・いいか？」

いいか？ってアンタ、それ、なによもー、マジ？

オレ1人で店の切り盛りなんて出来ませんから。

「来年はトモも受験だろ、その前に落ち着いてやらないと可哀想だし。」

ま、アイツは芯が強いし、悪い友達も居るから心配はしてないんだけれど・・・」

「心配なのは、オレですか？」

ニヤリと笑って見せたってことは、そういうことですか。

「わかってんなら、どーにかして下さい。」

「とりあえず、マダムは日本に居るからそう心配すんな。」

バイトも増やすつもりだし、オマエの下で働くヤツも入れるから。」

任される責任に嬉しい気がするけど、でも、なんだか・・・

取り残されていくような・・・そんな不安が沸いてくる。

「まだオーナーみたいに煎れられないですよ！」

「そこは経験しかないからな、合格点超えてるから心配すんな。」

でも、そう言われても・・・

期待に応えられない自分を想像してしまう、過度の期待に潰された自分を。

そこから逃げ出してきた、今のオレを・・・

「自信が無くて不安な気持ちもわかる、失敗を恐れるのなもの。」

オーナーの声は、優しく強く響く。

うつむいたまま、黙ってその声に耳を傾けていた。

「それでもオレは人を見る眼がアルんだぞ、そのオレのメガネに適ったんだ

少しはオレを信用して言う事聞いてくれてもいいんじゃないか？ハ

ル」

「でも・・・」

「やってみてダメならオレに言えればいい、出来れば続けられればいい、それだけだろ？」

・・・甘くないか、それって？

ダメだったら投げ出したっていいって、無責任過ぎないか？

無責任な気持ちでいいっての？それって、オレに期待はしてないって話か・・・

「勘違いすんなよ、テキトウにヤレって言ってる訳じゃないんだから。」

「そう聞こえますけど」

奥まった座敷は、そのふすま一つ隔てただけの店の賑わいとは逆にシーンと静かな空気が漂っていた。時折聞こえる、酔っ払いの怒声や甲高い笑い声で、ココが居酒屋だったと思い出す。

「言葉が足りなかったな・・・ハル、オレはオマエの可能性に賭けてる。」

今持つてる技術やセンスは、たった数ヶ月で簡単に習得出来るものじゃない。

いつまでもオレが手助けして、甘やかすわけにはいかないだろ？

コレはオマエにとってチャンスなんだ、その訳のわからないココのヤツを

追っ払うチャンスなんだぞ。」

と、オーナーは自分の胸を親指で刺しながら静かに言った。

「逃げるな、今、立ち向かえ、オマエは出来るだから。」

ずっと見つめていた自分の筋張った青白い手、その手の上に滴が落ちる。

オレが逃げてる事、オーナーは知ってたんだ。

なんにでも中庸で、なんにでも曖昧に接していた事を見抜いている。

「トモに初めて紹介された時、オマエの暗い瞳に驚いたよ。

全部諦めてる、そんな瞳をしてたな。一瞬の瞳の輝きを見つけるまでオレはオマエを信用できなかった。なんで、トモがオマエに惹かれるのか

皆目検討もつかなかった。けど、オマエは身体の奥底に、強い輝きを隠してる。

トモはそれに気が付いて強く惹かれてるんだ、ユウタとも違うオマエの力強い生命力に。」

ゆっくりと顔を上げると、そこには父親のような眼差しでオレを見つめる瞳があった。

こんな風に誰かに見つめられた事があったか・・・実の父親の瞳すら覚えていないのに。

勝手にあふれ出した涙は、乾いた頬を流れ落ちる。

「ハル、オマエが辛い思いを抱えてるのは知ってるつもりだ。」

大人気ないのはわかっていた、けれど止めることの出来ない涙

最後に涙を流したのはいつのことだろう、胸の中に溜まっていた淀んだ霞みが

スルリと涙に変わって流れ出していた。

胸の中の物をすっかり流し出してしまうと、なんだかヤケに身体は重いのに

心は晴れ晴れとして爽快に思える。オレが泣き止むまで、オーナーは黙って

ビールを飲んでいた。

人前で恥ずかしげもなく嗚咽した自分に驚く。

「この前、姉に会ったんです。何年も音信不通だった姉に・・・」

話す事で救われるとは思っていないけれど、オーナーに話しておきたかった。

子供の頃の悲惨な生活、両親の事、離散した家族の話を。

第17話

まとわりつくつーか、何、オマエ、最近、おかしいんじゃない？
前にも増してウチに入り浸ってね？正直・・・ウザ。

親友でもさー、四六時中一緒ってのはさー、マジキモイんだけど。
わかってる、ユウタ！ってヤツをギロリと睨んでも、

ユウタはふざけてストローをくわえ、シュツと水をとばす。

こうしてハルキさんの所に避難してるってのに、逆にからかわれる
始末だし。

「ホント二人は仲いいね、うらやましいよ。」

それ本気で言ってるでしょ、少年の友情とか清いとか考えてる、絶
対。

調子に乗ってユウタ、馬鹿、暑苦しいー無意味に抱きつくな！

「でしょー、オレらマジ仲良しでさーラブラブかも。」

「止めてよ、シャレになんないから」

馬鹿のさ背中におもいきりグーパンチを入れるけど、
これまた逆に喜ばれたりして、何者だオメーは！

馬鹿を相手にしてるイライラを感じ取ってか、ハルキさんが耳打ち
する。

「なに、ユウタと何かあんの？」

「ちょっとユウタ変なんだもん、オレに欲情してるってゆーか」
ニヤニヤしないですよ！

こっちは、マジメにビビってんだからさー。

「ぷはっ、マジ？友情と愛情取違えてんだな、ま、そのうち治まる
から大丈夫じゃない？」

「治まる前に、犯されちゃうって」

自分の貞操に危機に恐怖する。

想像しただけで、鳥肌ってゆーか、捕まって押し倒されたら逃げらんねー。

うーヤダヤダ。

「アハハ、何事も経験だから」

「もー、止めてよ!」

店にはママとハルキさんの二人、パパは昨日から出掛けていた。

ハワイだ・・・、友だちに会いに。

ウチのテーブルに無造作においてあった書類を見つけて、パパたちが何を企んでいるかを知ったのは先週のこと。

スグにハルキさんに探りを入れたら、その話は知ってたみたい。

オレは、どーなるのかな? ハワイに行く事になるのかな・・・

この馬鹿ともハルキさんとも離れて暮らす事になるのかな・・・

オレにベタベタと絡んでいる、ユウタの携帯が鳴った。

なにに、その鼻の下伸び切ったデレデレな顔・・・ニューな女?

「あ、メグちゃんからメールだあ、オレちょっと行くわ」

「誰それ?」

マジかよ、行動早いなあー。

「ムフッフ、新しいカノゲッター! じゃまたねー後で報告すつから」
ユウタは一気にジュースを飲み干すと、脱兎の如く店を飛び出して行った。

ん、ガノゲットってことは・・・オレの貞操が守られるわけで・・・

祝・カノゲット!

ホワワワッと気が抜けていくのが自分でもわかるし。

「トモ、これで一安心って感じ?」

「マジ、助かったーって感じ」

どっとカウンターに肘をついて脱力って、アイツに振り回されてもー散々だよ。

そうしながら、キビキビと働くハルキさんを横目で観察していた。
なんか吹っ切れてるような、前と違ってずいぶんスッキリしてる気がした。

大人だから、グダグダ悩んだりしないのかな？

ママがダラダラしてる、そんなオレの頭をペシッと叩いて睨んだ。

「ほら、お店でそんな格好しないの。宿題は？テスト近いんじゃないの？」

「わかってるよー、飲んだら帰るって。」

うるせーなーもー、ウチに帰ったって一人なんだもん、つまんないの。

わかんねーかなー、クソババ。

「トモ、この前はゴメンな」

スッとオレの前に来たハルキさんは、小さな声で、ボソボソっと謝った。

ああ、遊びに行ったときのこと・・・

「この前って？」

「ヒルズ行った時、オレ、なんか動揺しちゃってさ」

照れたような笑顔を浮かべてる。

大人でも照れるんだ・・・

「あ・・・ううん、大丈夫だから、気にしてないから」

「今度またどっか行こうな」

そう言って髪の毛をクシャクシャって・・・あ、ダメ、それ、ゾクゾクする。

思わずブルっとしちやっただじゃん、でなくても妙に敏感なになっている身体なのに、

オレのがよっぽど欲情してんのかもしんね、太ももの間がウズウズとくすぐりたい。

「オレ、帰るね」

「トモー、ちゃんと宿題しちやいなさいよー」

「わかってるよー」

クソババーのクソ余計な一言にムカつきながら、カウンターの
中で笑うハルキさんに

手を振った。クソババーがいなかったら、もう少ししゃべって
られたに・・・うぜえの。

コンビニでマンガを立ち読みしていると、目の前をうな垂れて通る
馬鹿発見！

アイツ・・・振られたとみた！！呼び出されたって、「ゴメンナ
サイ」って？

プハハハ、ざまーみろー。

ワザと声を掛けずに、コッソリその後を追った。

くー、可笑的いー何あの落ち込み具合、ギャップ激しくネ？

泣いてたりして。

ユウタはガツクリと肩を落としてうつむきながら、オレンチへ向か
って歩いている。

オレに慰めてもらう気なのか？ったくよー、面倒臭いってのぉー下
の世話は勘弁だかな、

そこんところはハッキリ断とかねーと、マジ調子こむかな・・・

ウチのマンションのエントランスで、ブザー鳴らしてるよ、出ねえ
よ、オレ、ココだもん。

しつけー、そんなに鳴らすなっのー。

ユウタは誰も出ないブザーを何度も何度も押して、そしてその場に
しゃがみこむと膝を抱えて顔を伏せた。

落ち込み過ぎじゃね？

しゃーねーなー、傷心な親友を見捨てらんねーし。

「ユウタ、何してんだオマエ」

「トモ、何処行ってたんだよ」

だー、だから抱きつくなくて、もー暑苦しいんだよ。
汗臭えーし、オメーの突っ立った頭が顔に刺さるっての！

「えーん、ゴメンナサイ言われたー」

「はいはい」

ガッシリとしがみつかれた状態のままで、ウチまでの数分・・・誰にも会わなかったことに感謝。

「ほら、早く入れよ、恥ずかしいから！」

ガキじゃねーんだから、自分で靴ぐらい脱げよな！

馬鹿の靴を脱がせながら、オレは自分の面倒見のよさに舌打ちした。

「何か食うか？」

首を横に振るなつてのーアタタ、刺さんだつてのー。

しがみつく巨体をソファーにブン投げて、大きく新鮮な空気を胸いっぱい吸い込む。

はぁーオトコ臭過ぎ、だから振られたんじゃね？ユウタくん、臭いから嫌！って。

オレも、こんな匂いすんのか？

クンクンと自分の匂いを嗅いでいると、馬鹿の腕が伸びてきてガシッとオレを掴んだ。

「うわぁ！痛えなぁー急に引っ張んなつて！」

「そばに居てよー」

無理矢理、腕引っ張るんじゃないよ、マジ痛えなぁーケツ打ったじやん！

あー、もー、くつつくなー、暑い、臭い、苦しい！！

「ガキかよ！」

「はぁー落ち着くう、オマエの匂いって安心すんだよー」

鼻押し付けて、嗅ぐな！

キモい！

「暑苦しいって」

「オマエ、なんでそんなに肌スベスベなわけ？色も白いさあ、もつと食えよ

ウエストも細すぎんだよ、ホラ、女みたいだぞ。男臭くねーし。」
んなの言われたって、オレのせいじゃねーって。

食ったって太んねーし、色白は生まれつきだし。

「なんか夢げで、女が騒ぐのがわかる気がする」

「んだよソレ！全然、嬉しくねーから」

離れない馬鹿の顔をグイッと突き離して、思いっきりぶん殴ってやった。

「いってー」

ユウタはグーで殴られた頭を抑えてうずくまったまま・・・動かない？

アレ、やっちゃった？急所に入っちゃった？・・・オマエ、生きてる？

恐る恐る、動かないユウタの顔を覗きむと・・・ギロッと光った目ん玉とバツチリ目が合う。

「テメー、落ち込んでるオレに、よくもー！！」

「うわあああ、ゴメン、ゴメン謝るからー許してー」

「ぜってー許さん！！」

「ひいっっ」

オレよりも背が高いうえに、ソファアの上に仁王立ちしたユウタの恐ろしい事！

その巨体が真上から襲い掛かってきた恐怖に、オレは卒倒しそうになる。

ガツッと音を立ててジャンプすんなー、オレの片手は後ろ手に捕られ、

ガッツリ馬鹿の筋肉質の腕でチョークスリーパーされて、く、苦しいいい

「親友のくせに、なんだその態度ー！傷ついてんだぞーフツは優しくすんじゃねーのかよお！」

「ゆ・・・タ、くる・・・し・・・ヤメ・・・」

「んだよ、自分は女に騒がれてるのも気が付かねーくせに、モテないフリすんの止めるよなー、マジムカついてきたー、このーバカチンがー」

「くっ・・・」

ダメ・・・完全入ってるし・・・ぼーっとしてきた。

この馬鹿、力加減、知んねー、タップしてんだぞー！気がつけええあああ、スーっーと意識が遠のいていく・・・気持ちイイ・・・

『・・・モ！トモー！トモトシー起きてよートモー！』
ん？ユウタ、うっせー。

気持ち良く寝てんだから、起こすなっのー。

突然、肺に送り込まれた空気の塊にギョッとして、意識がハッキリしていった。

『トモー！！』

再び気管を駆け下りていった、肺を押し広げる空気圧にむせ返る。

「ゲホゲホッ、くっー、はああー」

「トモー」

ボンヤリと目の前に浮かんでいたのは、馬鹿ユウタの蒼白な顔。

蒼白っていうか、マジビビってシッコ漏らしてそーな顔。

「よかったーあああ、生き返ったあああ」

く、苦しいいい・・・抱き絞めんなー、骨が折れるっの！
涙、流して喜ばなくてもいいから、オメー自分のやった事に反省してくれ。

ユウタは泣きながら何度もゴメンって謝って、強く抱き締め続けた。
いた。

勘弁してよー。

「んあああ、死ぬうう」

あがけばあがくほど、力を込めて抱き締める始末。

自分の唇に残るブヨっとした感触に気が付いて、オレは凍りついた。
オメーの口だよな、絶対・・・サイアクつか、信じらんねー、
こ、こいつ・・・オレのファーストキス奪いやがった！！

第18話

ズルズルと、いつまでも感傷に浸っている場合じゃなかった。オーナーにオレの抱える古傷を吐露してしまったからといって、それが少し癒された・・・なんてことは無かった、笑えるよ。

掘り起こされた辛い記憶が、これまで以上に重く辛く胸の内を支配していた。

それを忘れようと仕事に集中すればするほど、その後に待っている倦怠感。

頭と身体がバラバラだった。

クタクタに疲れた身体を引きずるように帰宅しても、

頭だけが妙にハッキリと色んな想いが一晩中駆け巡ったりする。

以前は浴びるように飲んでいた酒の味さえも、酷く不味く思えていた。

「痩せたな」

「オレ？」

マンションのテラスのデッキチェアで、共に休日の午後を過ごしていたミナミが

新聞を読みながらボソつと言った。

「少し太らないと、そのうちぶっ倒れるから」

「食ってんだけどな、栄養になってないのかな？」

大きなため息が新聞の裏から漏れる。

畳まれた新聞紙が床に投げ捨てて、イラついた顔をした親友がこちらを睨んでいた。

「ストレス溜め込みすぎなんだよ、最近、シテないだろ？」

「あ・・・シテねー。って、相手いねーもん、しかたないだろ」

ココに転がり込んでから、そんな気持ちはすっかりナリを潜めてしまってた

自分でも気が付かないくらいに無性欲・・・ヤバイ？やっぱ、そーゆーの。

かといって、ミナミが相手をしてくれるわけでもなし・・・

「何、見てんだ。ハルキは好みじゃないって昔から言ってたんだろ」

「わかってるけどさー」

そう、オレのミナミへの恋心はずーっと昔に封印したんだ。オレとオマエは

これからはずーっと親友のまま。それが一番心地よい関係だって気が付いて。

「紹介しよーか？」

「えー、面倒くさいって、そーゆーの。」

新しい信頼関係を築き上げる、そんな行程が億劫。

だったらこのまま一人でいたほうが、今のオレには合っているのに・・・

ミナミのお節介か？

「割り切りでイーじゃん」

「簡単にゆーなよー、そんな気分じゃないだから」

まったく、何を言い出すかと思えば・・・だったら自分で抜くってな。

「いつの間に、そんなオヤジ臭いヤツになったわけ？」

「ハイハイ、加齢臭プンプンですよ」

ギシッとイスが軋む音がしたかと思うと、仰向けに横たわっていたオレの身体の上に

スルリとミナミはその身体を重ね、柔らかな頬をオレの肩にのせた。

「な、何、どうした？」

「はぁー、なんか疲れた」

細い腰に腕を回して、久しぶりにミナミの匂いを近くで感じていると妙に懐かしい気持ちが入み上げてきた・・・昔は、いつも近くにオマエがいたよな。

昨日までの1週間、家を空けていたミナミに、何があったのかは知らないけれど、

腕の中にいる親友が、とても傷ついているように思えてならない。こんなにも弱々しいミナミを、今までに見たことがあっただろうか？

「強烈な人たちの中にいたからさ、疲れちゃったんだ」

「バイト？」

瞼を閉じたまま、コクンと頷く。

力を入れれば折れてしまいそうな身体で、傷つきやすい心を必死で隠して

身を削ってオマエが手に入れようとするものは、一体なんなんだ？

「ゴメン、ハルキもボロボロなのにさ、甘えちゃってゴメン」

「いいよ、オマエにしてやれる事ってあんま無いし」

ミナミの腕が、オレの身体を抱きしめた。

「少し、こうしてていい？」

「ああ、好きなだけいいよ」

滑らかな脚をオレに絡め、柔らかな絹糸のような髪がアゴをくすぐる。

侵してはならない聖域が、そこにはあった。

オレは、ゆっくりとゆっくりと胸いっぱい深呼吸をしてみた。

吐き出される息と共に、胸の中に溜まっているモヤモヤが吐き出されている気がする。

本当、ストレス溜めすぎだな。

身体を重ねたミナミの温もりが、とても心地よい。

安らかな気分で、オレは頭上に広がる突き抜けた青空を仰ぎ見た。

一人じゃダメな時もある・・・誰かが傍に居てくれるだけで・・・
それだけで、心のしこりが溶けてゆくことがあるって・・・
今更だけど、わかった気がするよ、ミナミ。

第19話

まだ11月初めだっというのに、雪でも降ってきそうに寒い。

ユウタとオレは、ハルキさんに何か暖かいものを飲ませてもらおうとポケットに両手をつっ込んで、早歩きで店へと向かっていた。

例のユウタの発情は、思春期の一時的な事だったみたい。

ハルキさんの言っていた通り、変な言動は多少残るもののフツのユウタに戻っていた。

まったく、コッチがおかしくなっちゃいそうでドキドキだよ。

オレのファーストキスまで奪いやがって・・・生き返ったから良かったものの

あのままイってたらシャレにならないっての。

あの後、2、3日無視してやったから、すっかりシヨゲたユウタの可愛いこと。

もう少し無視してやればよかったかな。

「オレ、ホットチョコレートにしようっ」と

「オレもー」

口の中いっぱいアツアツのホットチョコレートを想像しながらオレらは、銀行前の信号で立ち止まった。

「スゲー、見ろよアレ」

「コルベットじゃん」

真っ赤に磨き上げられたコルベットが、店の前に堂々と路駐していた。

その派手な車体に、誰もが1度は目を留める。

「やっぱ、アメ車は目立つよなー」

「うん」

首の裏側がザワザワつと騒ぐ感覚・・・何？

信号が青に変わったと同時に、オレは店へと走り出していた。

「トモ、待てってばー」

店の自動ドアが開ききるのももどかしく、半身を滑り込ませたオレの目の前に、後姿の女性が立っていた。長い巻き髪、腰のクビレた女の人。

彼女の脇をすり抜けたときの、場違いな香水の匂いが鼻につく。

パパは、カウンターの中で固まるハルキさんに耳打ちした。

「スミマセン」ハルキさんはそう言って、オレの目をチラリとだけ見つめ

その女性と店の奥の席へと場所を変えた。

「オジサン、ホットチョコレート」

「ハイハイ」

事情を知らないユウタのデカイ声が、妙にオレの脇で響く。

奥の席の二人を気にしながら、オレは二人に背を向ける格好でカウンターに座った。

チョコレート甘い香りが辺りを包んでいたのに、オレの口の中だけはアノ香水の苦い香りがしている。

「おじさん、アレだれ？ハルキさんの彼女？」

「ハルの姉さんだ」

「へー」

ユウタは物珍しそうに、後ろを振り返った。

オレといえ、その後ろの二人を見てはいけない気がして、背を向けたまま、パパの手元をじっと見つめていた。

だって、あんなに無表情な顔して。

さっきのハルキさんの顔が、目の裏に焼きついてしまっただけ離れない。会いたくなかったのかな、やっぱり。

「トモ、明日から宜しくな」

「うん」

パパはホットチョコレート上に生クリームを垂らしながら、

後ろの二人の事など無関心のような口調で言った。

緩く泡立てられたクリームが、チョコレートの上にトロリととける。

「明日、なんかあんの？」

「パパとママ、明日っからハワイに行くんだって。」

「マジー、いいなあーおじさん、お土産買ってきてよー」

二人で14日間の滞在予定で店の準備に出かけるらしいけど、予定通り帰ってくるかは微妙だな・・・この前だって、結局、1週間伸びたし。

「えー、じゃあトモ、初一人暮らし？」

んな、身乗り出して耳元で叫ぶなよー

オマエの声は十分デカイから、十分聞こえるってば。

最高に美味しいホットチョコレートを口に含んで、喉の苦味を追い

払う。

「なんか、ハルキさんが泊まるって」

「マジー、オレも泊まっていいい？」

だからー、声が大きいの！

キンキンとする耳を塞いで、ユウタを向こうへ押しやる。

そうしたって、スグにオマエの顔はオレのスグ脇に戻るんだけど。

「やだよー、オマエ来るとうるさいから」

「なんだよ、ハルキさんと二人っきりで何すんだよ」

「なんだよ、ソレ」

訳わかんねー。

その拗ねた態度は何なんだよ、馬鹿は放っておこう。

ボソボソと話すハルキさんの声とは対照的に、穏やかな女性の声は何故か不快に感じられる。

穏やかな口調・・・だけど、それがヤケに相手を責めているような、そんな印象。

イヤな・・・感じ。

きき耳を立てても一向に聞こえてはこない内容に、オレは多分イラついていた。

口からこぼれた微かなため息に、ユウタは敏感に反応した。

「気になる？」

「何が？」

ユウタは見せたことのないような、中途半端な微笑みを浮かべ肩越しにハルキさんたちを盗み見ながら言った。

「この前さ、ハルキさんと歩いてた時に、バツタリ会ったんだあの人と。」

それからハルキさんの様子がおかしくてさ・・・」

「そっか、姉弟でもワケアリなのかもな」

「そうみたい」

カウンターに肘をついて、後ろを気にしながらホットチョコレートを飲むオレらの姿を、

パパは中から黙って見ていたに違いない。

わざとらしく「そうだ!」と大きな声で言うと、オレたち二人に封筒を差し出した。

「ホラ、冬の合宿のパンフ来てるぞ」

『見せて、見せて!!』

ユウタとオレは口を揃え、パパの手から勢いよく封筒を奪い取るとスキーシーズンの到来を告げるソレを手に、高揚した気持ちで中身を引っ張り出した。

「猫魔かよー!」

「アルツがイイのにー!」

「文句ばっか言ってるな!!」

飛んできたゲンコツをかわして、二人、顔を見合わせてニヤリと笑う。

やっと冬到来って感じで、いい感じじゃん?

相変わらず背中が気になってはいたけれど、目の前に広げられた申込用紙から目が離れない。

24日から? クリスマスイブから30日までの7日間。

今年のクリスマスは、ゲレンデでホワイトクリスマスになるんだ。

相手は、まあ居ないけど、かなりロマンチックかも。

「カナ先輩も来るかなー」

「えー、今度はカナ先輩狙い？」

「だって、結構カワイイじゃん」

「彼氏いんじゃない？」

「いないって言ってたしー」

「また振られっから」

そんな具合でオレたちがワイワイ騒いでいた間に、

ふと顔を上げると目の前にハルキさんが・・・いつの間にかカウンター内に戻っていた。

店の前に停めてあったコルベツトも、やはりその姿を消していた。

「え、何々、何騒いでんの？」

「コレ？オレらのスキー合宿のパンプ。毎年参加してんだーハルキさんもスキーやる？」

「オレ、ソツチは全然ダメ。真っ先に寒さにやられちゃうし」

いつもと変わらないハルキさんが、妙な具合に感じられるのはオレだけかな？

ユウタと頭をつき合わすようにパンプを覗いている横顔を、オレはじっと見てしまった。

そのことに気が付いて、ハルキさんは前髪の間からチラッとコチラを見て肩をすくめて見せた。

「ハル、今日は先に上がるからな、終わったらウチに寄ってくれよ」

「ハイ」

パパはハルキさんの肩にその手を置いた、パパの手の温もりに勇気

付けられたかのように

ハルキさんは「大丈夫」とでも言うように大きく頷いていた。
きつと、パパは知ってるんだ・・・ハルキさんの事情ってヤツを。

第20話

今日も何の前触れも無く現れた姉に、その存在をすっかり忘れていたオレは動揺する。

店の前に停まった赤い車を見た瞬間に、グッと込み上げた感情にレジを打つ手が止まる。

そんなオレの様子にいち早く気が付いたオーナーは、咳払いを一つしてみせた。

店の自動ドアがスーッと開き、この店にはそぐわない格好をした女が、オレの目の前に立ち止まりニツコリと心無い笑みをこぼす。

「こんにちは、来たわ」

「ああ。」

店内の視線を全身に感じているのに、少しも臆することなくオーナーに頭を下げる。

完璧なその動作に、姉の身に付けた全てが見えた気がした。

「初めまして、ハルキの姉のチアキです。弟がお世話になっております」

「初めまして、オーナーの内藤です。」

こちらこそ、ハルキくんに助けてもらっているんですよ」

屈託無く微笑む、オーナーの紳士な態度。

この対照的な二人に共通点・・・プロ意識か？

オレだけが、強張った顔で姉を見つめていた。

その時、店に駆け込んできたトモの憂患な顔が、オレの目に飛び込んできた。

この子はわかるんだな、オレの胸の中が・・・トモの感受性の強さに心打たれる。

情けないか・・・チアキの出現くらいで動揺してるなんて。

チラリと、トモを見やる。

「ハル、向こうで話してきなさい」

「スミマセン」

オレと姉は、オーナーに言われるまま店の奥まった席に場所を移した。

この女が何をしに来たのか、皆目検討もつかないが・・・

チアキは長い髪をかき上げて、その色香を存分に強調する。まったく、どこまで女なんだか。

「で、何？」

「アンタがどんなところで働いているのか見たくって。」

興味深そうな素振りで辺りを見回しながら、肩をすくめてみせた。オレに女を振りまくなよ、気色悪い。

「それだけじゃないだろ？」

「まあね、ナツキが会いたがってたわ、ボクの兄さんってどんな人なの？って」

「そう」

オレの表情を探るように、ワザとらしくゆっくりとしゃべっているんだ。

途切れた絆は、失った時間と一緒に取り戻すことなんて出来やしないのに。

何が目的なんだか・・・

「そういえば、父さんの遺産、おじいさんが管理してるんでしょ？」

「ああ」

「何か使う予定あるの？」

「別に、興味ないから」

「そう、なら私に貸してくれない？」

「はあ？」

「ナツキを面倒みてるのは私だし、アンタはこうやってダラダラしてるし

必要ないでしょ、お金なんて。私、必要なのよ、お金が。」

結局、それか。

「オレに言ってもしょうがないよ、じーちゃんに言えよ」

「アンタがイイって言えば、貸してくれるって言ってたわ」

「好きにしろよ」

満足気に微笑んで見せたその美しい顔が、とても醜く見えた。自分自身を犠牲にして家族に尽くしていた女の変貌ぶりに、悲しみを通り越して「何故だ？」という疑問が浮かんでくる。

「なんか、変わったな」

「そう？前からこうよ、生きていくにはお金が必要なのよ。アンタだって、そんなことくらいわかってるんじゃない？」

「ああ、そうだった」

女を作って家を出て行った父親が残していったものは、酒に溺れた母親と、生活苦、そして幼いナツキだ・・・

オレとチアキの二人がギリギリの生活の中、

どんな子供時代を送ったか忘れた事など一度も無い。

「金はヤルよ、オレには必要ないし。」

もともとオレに使わせる気なんて、じーちゃんは無かったんだから」

「アンタが、ちゃんと大学に行ってれば、くれたんじゃない？」

「なんの為に大学行っただかわかんないよ」

「いいんじゃない、意味なんて無くたって、大卒は大卒なんだから」

一般的なご意見をどうも。

「行くわ、おじいさんの家にも寄りたいし」

「ああ」

チアキは立ち上り、数歩、歩いて振り返る。

「今度3人で食事しましょう。」

ナツキってね、男の子にしとくの勿体ないくらい可愛いんだから」

吐き気を感じるほど、胸が重く苦しい。

血を分けた姉に会っているだけだというのに、なにもこんなに拒絶しなくたって。

チアキと確執があったわけでもなし・・・何故かな・・・

訪れた時とは打って変わって、チアキはまるで逃げるように店を出て行った。

オーナーに軽く会釈だけして。

大きなため息が、勝手に口からこぼれる。

この先、避けては通れない事実を無理矢理突きつけられたって事か。カウンターに座る、二人の少年の無邪気な笑い声だけが救いかな。

ふと、先日の休日を思い出していた、珍しくオレに甘えたミナミ。今のオレの気持ちも、あの時のミナミと同じくらいぐったりと疲れてしまっている。

オレの身体の上で眠ってしまったミナミの、安堵した寝顔を思い出しながら

もう一度大きく息を吐き切った頃には、鬱々とした気持ちが少し晴れていた。

さて、もう一仕事。

気持ちを切り替えて、頑張るか。

ゆっくりと立ち上がって、オレは自分の居るべき場所へと戻った。

第21話

別にいつものことなんだけど、一人っきりのうちの中がやけにだだっ広く感じて妙に落ち着かない気がした。

パパとママが午前中のうちに慌しく出掛けてしまったから土曜日だっていうのにヤケに静かで・・・今のうちはね。

ユウタがやってきたら、ゲームやらせろだの、遊びに行こうだの大騒ぎが始まるに決まってるんだ。

夕べ、店を上がってからウチに来たハルキさんとパパたちは、リビングで酒を飲みながら遅くまでボソボソと話をしていた。その聞き取れない話し声をベッドの中で聞きながら、オレは眠りに付いた。

今朝は慌しいママの仕度の音で目が覚めて、パスポートがどうかチケットがどうかのとか、そりゃ嵐のように家中駆け回って寝てるところじゃなかった。

ボーっとテレビを観ながら、パパと二人で呆れてママを見ていたんだ。

パパたちが戻ってくる間、店の営業時間が短縮されるって。

オレのせい？オープンもクローズも1時間ばかり短縮されるって。

店の世話とオレの世話を押し付けられたハルキさん、

ちゃんと時間外手当貰ってるのかな？迷惑掛けないようにしなきゃ・・・

もう少しでお昼って時間に、電話が鳴った。

店からのナンバー、ハルキさんだ。

「おはよう、起きてる？」

「起きてるよー何時だと思ってるの？」

「アハハ、だよな。トモ、7時過ぎには帰れるから、晩飯ソレからでもいい？」

「いいよー、あ、ユウタもくるから」

「OK。そうだ、お昼、店に食べに来たら？」

「あー、面倒だからいいよ、カップ麺あるし」

「そう、じゃあ何かあったら電話して」

「うん、じゃあ」

思いつきりガキ扱いだよな、みんなして。

この年まで一人でいるのは慣れっこなのに
今更なんだよーって感じだけど・・・オレが悪さするんじゃないかって

心配してハルキさんを付けたとしか思えない・・・ウチの親。

外は気持ちがいーくらい晴れていて、こうしてうちの中に閉じこもっているのが

勿体ないように思えた。ユウタはどうせ夕方じゃないと現れないし。
何処かへ行くアテがあったわけじゃないけれど、

ジーンズの尻のポケットに財布を突っ込んで、お気に入りのパトリックに足を入れた。

「うわぁ！」

玄関を開けようとした途端、引かれたドア。

危うくバカと頭突きをするところ、アブねーなー。

「なによトモ、どっかいくの？」

「天気いいから外行こうと思って」

「あー、オレも行くわ」

あー、ビックリした。

「昼、食った？」

「まだ」

「んじゃ、マック行かね？」

「えー、マック？米食いてーんだけど」

「じゃあ、コンビニで弁当買って、公園行こうぜ」

「それ、賛成」

エレベーターの中で決まった昼飯の相談。

並んで歩いてコンビニへと向かう・・・あれ、ユウタ、背がまら伸びた。

くそー、どんどん大きくなりやがってー、オレなんて、今年は2センチしか

伸びてないのに。なんか、悔しいかも。

「どうしたの？」

「ユウタ、また背が伸びただろー」

「そう？」

「だって、オレの頭オマエの目のとこまでしかない」

「そっかー？オレって伸び盛りなのかなー身体が痛いのはそのせいかな」

少し見上げるように、ユウタの顔を見る。

いつものバカっぽい顔なんだけど、なんか大人びて見えるのは気のせいかな。

頬の肉がスッキリしてる、オレが女だったらこうゆうヤツと付き合いたいかな。

「な、なによ」

「別に」

「えー、何、なに？ 気になるー」

「相変わらず、バカっぽい顔してんなーって思っ」

「ひでー！」

「あはは、ほら、早く選んじゃえよ」

「むー」

コンビニ袋を提げて、噴水のある公園へと向う。

昼下がりの公園で、幾人かがオレらと同じように昼飯を食っている。

「ベンチ、塞がってんな」

「ほら、噴水のフチんとこでいいじゃん」

「だな」

スラリとした男のヒトが一人、先にその場所で昼飯を食べていた。

洗いざらしの白いシャツに、暖かそうなフリースのジャケットを着て高そうなプレミアムジーンズをはいていた。

そのヒトと少し間を開けて、オレたちは座ったんだけど・・・

オレもユウタも、何故だかその人の存在が気になって仕方がない。上手そうにサンドイッチを頬張っている姿に見とれるっていうの？

こういうのって。

自分たちの弁当も広げずに、ジッと見ていた。

「なあトモ、あのヒト格好よくね？」

「やっぱそー思う？ 目立つよね」

その人の携帯が鳴った。

悪いとは思ったけど・・・盗み聞きしてる。

『ん、今？近くの公園、噴水のあるところ、わかる？・・・うん、そうなの？』

じゃあ、来ればイイじゃん・・・あ、うん、アイスラテがいい、うん、じゃあ』

恋人と待ち合わせの約束かあ、だよなあ、大概格好イイ人には恋人がいるんだよな。

ハルキさんだって、友だちだって否定はしてるけど女の人と暮らし
てるんだし。

オレたち二人が刺すような視線を送っていたからか、

その人は、オレたちの方を振り向いてニツコリと微笑んだ。

正面からみたそのキレイな顔に、思わず手にしていた箸を落としそ
うになった。

「スゲーヤバイよ、トモ」

「う、うん・・・ヤバすぎ」

ドギマギときこちなく弁当を口に運んでいたけれど、

それが何処に入っていたのかわからなくて・・・食べた気がしな
いよ。

ユウタも同じことを感じていたらしく、ボソボソっと小さな声で言
うんだ。

「なんか食った気しねー」

ぷっ！思わず飲んでいたウーロン茶を噴出しそうになりながら、
手の甲で口から垂れた水滴を拭った。

そんなオレらの様子なんて気にも留めずに、その人は噴水に片手を
浸して

子供が遊ぶように水をかき混ぜている。

その時、公園の入り口から見慣れた姿がコッチへ向かって真っ直ぐに近づいてくる・・・手には店の手提げ袋を提げて。

「なにしてんの、二人とも」

「ハルキさんこそ」

「オレは早目の休憩、今日はなんだかヒマなんだよ」

そう言って、手提げ袋を掲げて見せた。

そして・・・隣に座る、アノ男の人へ投げかけた笑み。

ズキン、とオレの胸が痛む。なに・・・コレ？この感じ。

初めて目にしたハルキさんのその笑みは、愛しい人にだけ向けられる特別なもののように思えた。

「友だちと待ち合わせしてるんだ」

「うん」

その人は、水に手をつけたまま微笑んでコチラを見ている。

目に掛かった前髪を、その濡れた手でかき上げた仕草、

水滴がキラキラと光りに反射して、膝の上に零れ落ちた。

「なに、どうしたの、髪の毛切ったの？」

「んー、気分転換・・・疲れてたから。元に戻したんだ」

「久しぶりに会った気がするな、その姿」

真っ直ぐにその人の元へと近づいていった、ハルキさんの嬉しそうな横顔。

ハルキさんがその人の髪の毛を撫でると、絹糸のような髪がサラリと揺れた。

「変？」

「いや、懐かしいっていうか・・・」

まるで恋人のように、その人の耳元で囁いたその言葉は、オレには聞こえてこない。

「バカかオマエは」

その人はそう言って、ハルキさんの胸を押し返した。

ふざけたように笑い合う二人の姿に、何故か胸が苦しくなる。

オレの知らないハルキさんの姿を見せ付けられたからかも、それとも・・・

「なートモ、あの二人どー思う？」

「どうって？」

「デキてる？」

「男と？」

「ありえなくは・・・ない」

「んー、デキてはないんじゃない？」

マジマジとオレの顔を見ながら、ユウタは意地悪くニヤリとする。

「オマエ、妬いてるだろ？」

「は？なにそれ」

的を射たユウタの言葉に、ハツとして視線を落とす。

そうだ、オレ・・・あの二人の関係が気に入らないのかもしれない。なんでそんなこと感じるのかよくわからないけど、

ハルキさんのあんな嬉しそうに、楽しそうに話す姿にショックを受

ける。

オレと話するとき、あんな顔した事ないから・・・

二人の關係に嫉妬しながら、あの人には敵わなくなって白旗揚げてるオレ。

だって、全然大人だし、格好いいし、ああしてハルキさんと一緒にいるのが

とっても自然に見えるし・・・手に持ったペットボトルを転がしながら

オレは、羨ましく思いながら、黙って二人を見つめた。

第22話

クスクス笑いながらストローの紙袋を宙に飛ばし、ミナミは小声で言った。

「オマエも罪作りだよな」

ソレを拾い上げながら、オレはミナミの顔を仰ぎ見る。

「なにが？」

「ほら、あの二人の顔みなよ・・・可愛いよな」

懐かしいミナミの姿に歓喜したオレをたしなめるように睨みながら、少し離れて座る少年二人の方に目配せをしてみせた。

チラチラとコチラの様子を伺いながら、コソコソ話している背中。

「まだ、子供だよ」

「ハルキはそーゆーところ、鈍いよな」

アイ斯拉テを口に含みながら屈託無く笑うミナミの横顔に、ずっと、長いことフタをしていた感情が、ガタガタと音を立て始めている。

一緒に暮らし始めて数ヶ月が経つというのに、今更なんだっていうのか。

「そういえばさ、急にリョウのこと思い出して・・・
今もたまに思うんだ、あの時はアレで良かったんだって」

あの時・・・オレの恋人がミナミに心を奪われた、あの時の結末。

この目の前の友人は、オレでなくオレの恋人に手を差し伸べて微笑んだ。

恋人を失ったこと以上に、ミナミを失った虚脱感にさいなまれたオレ。

恋人を手渡して去った部屋に戻って・・・ミナミと離れた時間が悔やまれた。

「リョウはどうしてる？」

「元気そうだよ、たまにメールが来るだけ。アイツが一人前の医者になったら

寄り戻してもいいかな、今は北海道で大学生活満喫って感じじゃない？」

たまにオマエのことがわからなくなる。愛するだけ愛して、そうも簡単に手放せる？

まるで慈善事業みたいじゃないか・・・未練とかそんな言葉は確かに似合わないけれど。

「ねえ、仕事終わったらデートしない？」

「だから、今夜からしばらく子守りがあるって言っただろ」

「そっか、そうだった」

魅惑的なオマエの誘いを断るのは、相当、勇気がいるんだぞ。

本当だったら、今すぐにでも二人で何処かへ行ってしまうたい。

それをしないのは、きっとあの厚い信頼を裏切りたくないからなんだ。

オレは、二人の少年の背中を見つめる。

「ミナミ」

「ん？」

「何かあったのか？」

「わかる？　だったら、傍に居て抱きしめてよ・・・」

水に手を浸して、そんな消え入りそうな声で呟いたのは、オマエの本心か？

「アハハ、冗談。」

「おい！」

勢いよく立ち上がると、飲みかけのカップをオレに押し付けて微笑む。

その瞳が笑っていないのが、この胸を締め付けていること・・・オマエは知ってる？

「ハルキ、オマエが泣きそうになってどーすんだよ、振られたのはコッチなんだから」

「今から何処に行くんだよ」

「ま、慰めてくれるだけなら、たくさんいるしね」

昔はよくそんな顔したよな、何か企むような、自分から厄介ごとに首突っ込むような。

大人しくなったと思ったのはオレの勘違いで、今でもオマエの中にはあの頃と変わらない・・・

「ダメ！」

とっさに口を出た言葉。

「それ、絶対ダメ！」

「んだよ、急に、らしくないなあ」

「オマエ、オレが仕事終わるまで、アイツらの子守してろよ」
「はぁ？冗談でしょ」

そんなに顔をしかめて嫌がらなくてもいいだろ、可愛いって言うってたんだから。

少し毒がアリ過ぎるかもしれないけど、いい遊び相手になってやるんじゃない？

知ってるんだから、オマエが面倒見のイイヤツだったの。

オレは意地悪くニヤリと笑って、ミナミの肩にポンと手を置く。

「マジで？」

「マジで」

ミナミの大きなため息が、ハーーーーっとオレの首筋にかかった。

「アイツらも、ヒマしてるしさ」

「オレは、責任とれねーぞ」

「オマエもヒマなんでしょ？」

軽くなった頭を掻き筆って、ミナミは諦めたように頷く。

オレは、ずっと聞き耳を立てている二人の少年へミナミを預けることにした。

第23話

なに、この展開・・・オレとユウタは顔を見合わせて困惑した。
無邪気に噴水の周りを駆け回る小さな子供が、その人の目の前で転ぶと

彼はスッと手を差し伸べて、小さな膝のホコリを掃ってあげている。

「二人でアイツを見張っててくれない？」

後ろを振り返りながら、ハルキさんが言った。

「えー、なんで？」

「悪いことやらかしそうだからさ」

その人はコソコソと話しているオレたちを、少し離れたところで見ていた。

嬉しい光景を見ているように、口元に笑みを浮かべて。

「悪いことって、何よ？」

「イロイロと」

「ハルキー、いい加減なこと吹き込むなよ」

そう言いながらコチラへ近づいてきて、ハルキさんの頭を軽く小突いた。

ハルキさんが心配するのが嬉しいんだ、きっと。

「ども、ツツキです。」

「この子がトモで、こっちがユウタね」

細い指先で前髪をかき上げた時、甘い香りが風に運ばれて届いた。
ツヅキさんの耳打ちするハルキさんも、同じ香りを嗅いでいるはずで
やるせない気持ちがオレの中に芽生えている。

イライラとし感情がワケも無く込み上げるのは、二人の関係に嫉妬
した気持ちから。

そんな自分の気持ちを冷静に考えてもイライラするばかりなのに。

「ヤバ、じゃ、オレは行くから。あとは宜しく」

「宜しくって・・・」

腕時計を見ながら、走っていつてしまったハルキさんの姿は、
あっという間に公園の外の雑踏に紛れてしまう。

どうする、オレ？

この人だって、戸惑ってるはず。

見ず知らずのオレらだもん・・・しかも、中学生だし。

「ま、オレの事は気にしないで、じゃあな」

「待ってよ」

オレたちの静止も聞かずに、ズンズンと歩き出したその後を追う。

「付いて来ても、何もないよー」

「ハルキさんと約束したし」

ピタリと足を止めて、振り返る・・・

そう言ったオレの目の前に、そのキレイな顔を近づけた。

「オレと一緒にいたら、とっても怖い目に会うかもよ。」

・・・アハハ冗談、ハルキに言っというて、今日は大人しくしてるか
らって」

「でも・・・」

「じゃ、そういうことで。別のお迎えも来たみたいだし」

公園の前に1台の車が停まった・・・シルバーに輝くメルセデス。窓がスーと降りて、見るからに金持ちそうな女がコッチに向かって手を振っていた。

ツヅキさんよりハルキさんよりも、かなり年上の女。

「ちょっと待ってて」

車の相手に軽く手を上げて、ツヅキさんは何故か小さな声で言った。

「この事はハルキに内緒だよ、五月蠅いからさ」

彼が去ってしまった公園で、オレとユウタは困ったように顔を見合わせていた。

ハルキさんに内緒にしなきゃいけないんだ・・・なんでかな・・・五月蠅いから？

なんだか、全てに脱力してしまって、オレは大きくため息をついた。

「どうする？」

「どうするって、行っちゃったし」

「ゲーセンでも行くか？」

気乗りのしないまま、ユウタに連れられてゲーセンに入ったけれどオレはスグに飽きて・・・ゲームに夢中のユウタを残しゲーセンを出た。

ブラブラと歩き回って、結局、たどり着いたのはウチの店。ハルキさんとの約束を破ってしまったから・・・入りづらい・・・

「あれえトモ、1人か？」

「ごめん、ツヅキさん行っちゃって」

「アイツめ逃げたな・・・いいって、いいって、中に入りな」

バツが悪いってこういう事だね、普段よりも暇そうな店内を見回して
オレはモジモジとカウンターに座った。

「アイツあんなだろ、危なっかしいっていうか、ほっとけないって
いうか。」

ま、逃げられるってわかってたけど・・・誰か、迎えにきたんだろ
？」

「えー、なんでわかんのか？」

「そーゆーヤツなの。あの顔であの性格だろ、手当たり次第なところ
あるし」

ハルキさんは、オレの前にスツとミルクティーを置いた。

「ゴメンな、変な気をつかわせちゃって」

「ううん、目の保養になった」

「アイツはキレイだけどな・・・トモには目に毒だぞ」

こんなたわいない会話なのに、心が躍る。

ずっと憧れていた兄弟が出来た感覚？お兄ちゃん・・・違うなあ

ハルキさんの指先をじっと見つめながら、オレはミルクティーをか
き混ぜた。

薄い皮膚がスプーンに張り付いて、それを口に運ぶ。

「ツヅキさんって・・・ハルキさんの恋人？」

「そう見えた？・・・違うなあ、そんなじゃないかな。」

オレとアイツはそんな関係じゃないんだ、親友ってヤツかな」

「親友？そんな感じには見えなかったから」

何言ってるんだ、オレ。

そんなこと、オレには関係ないことなのに。

ツヅキさんの存在がスゲー気になって、どうしようもない。

「まあね、前はそういった感情が無かったわけじゃないけどね。アイツとオレはそういった運命っていうか、永遠の愛に近い友情って言えばいいかな」

永遠の愛情に近い友情って・・・それって運命の人ってこと？
あの人の為なら、自分を犠牲に出来るってこと？

「何、難しそうな顔して・・・」

「ツヅキさんて・・・ハルキさんの何？」

「だから、今は友だちだって」

「そうじゃなくて、あの人の為なら死ねると思う？」

「んだよ、大袈裟だなあ。アイツの為に死ぬのはヤだよ、
オレの命を捧げる価値は、今のアイツには無いね、ヤダヤダ」

顔をしかめて否定したけれど、きっとハルキさんはあの人の為になら
全てを投げ出せるんだ、そうに違いない。

いいな、そんな人が心の中にいるのって、羨ましい。

ユウタの為に、オレ・・・出来るかなそんなこと。

きっと同じこと聞かれたら、ハルキさんと同じように
ヤダヤダって嫌な顔して否定してみせるんだろうな。
そんな感じ。

ユウタに永遠の愛を誓えるかは疑問だけど、

アイツが居ない生活なんて考えられないからなあ。
この気持ちの、もっと上の感じなんだろうね、ハルキさんとあの人の関係。

「まだ、何か考えてる？」

「んー、オレとユウタはどうかなって」

「ま、近いね、ソレに。もう少し大人になったらわかるって」

そうかな・・・大人になったらわかるのかな。

もっと長い間、一緒に過ごして理解し合って繋がっていくってこと？
色んなこと一緒に乗り越えていくってこと？

そんな長い時間が、ハルキさんとあの人の間には流れてるんだ。

オレなんて、知り合ってほんの少しだもんね。

わからないことがあって当然なのに、もっともっと知りたいって。
ハルキさんの色んなところ、知りたい理解したいって思うんだ。

だってもう、ハルキさんが居ない生活・・・考えられなくなってるんだよね、オレ。

第24話

こうやって、アイツからの連絡を待っているのも、ずいぶんと慣れた筈なのに、いつも以上の不安に駆られる気持ち。アイツが髪を昔のように切ったからかな、その頃の面影に、オレ自身がひどく動揺してしまったからなんだろう。

もう随分前のことなのに、未だにチクリと胸の奥で疼くあの時の傷。再びこの手に戻ってくることは無いと思っていたのに、それはあっさりと、たった電話1本のことだったなんてないや、わかってたんだ。

アイツの性格はオレが一番良く知ってるから・・・それをしなかったのは

また自分が傷つくことを恐れていたから・・・また失うことへの恐怖心。

「ハルキさん、ハルキさんてば」

「ん、何？」

「ユウタ、今日は来ないってメールきた」

「そっか、せっかくメシの用意したのにな」

いつの間にか、カレーの鍋をかき回す手が止まっていた。

ソファアールからコチラを振り返って、不思議そうな顔をしてトモが言った。

「ハルキさん、まだく腹減った」

「ん、出来たよ」

テーブルに向かい合って座ったトモは、カレーを口に運びながら

グズグズと煮え切らないオレの心を察して言う。

「あのさ、もしかして心配とか？」

「なにが？」

「ほら、ツヅキさんのこと」

「ああ、アイツ？心配はしてないけどね、また何か悪さしてんじゃないかと思って」

「それって、心配っていうんじゃない？」

「意外に鋭いねートモ」

トモは笑ってみせた。

オレの顔に何か書いてあるのか？そんな顔してたかな・・・どっちが年上なんだか。

「連絡来ないの？」

「無い。アイツはさ、自分から連絡してくるタイプじゃないんだ」

「じゃ、ハルキさんがすれば？」

そうだ、オレが連絡すればいいんだ。

メシが終わったら、電話してみればいいだけのこと・・・

「そうだな、後でしてみるよ」

「ツヅキさんって、ハルキさんの特別な人なんだね」

「どうかな・・・」

トモの言葉にギクリとした。

この子の感受性の強さに、また驚かされる。

純粋な眼差しで真っ直ぐにオレを見つめ、オレの想いまで見透かす。

「ツヅキさんもさ、ハルキさんは特別なんだよ。」

だから、あんなに自分勝手できるんじゃない？」

「それは・・・言えてるかも」

トモが食器を洗ってくれている間に、オレは1人でベランダに出た。
ミナミの携帯へ電話を掛ける為に。

冷たい夜風にブルッと震え、暖かな明るい部屋の中を覗きながら、
ミナミが携帯に出るのを待った。

「どうしたの、何かあったの？」

ミナミの第一声に苦笑してしまった。

何が・・・って、コッチが聞きたいのに・・・

「オマエこそ、逃げたくせに」

「アハハハ、オレに子守は無理だから。」

「今、どこ？」

「大人しくウチにいるよ、今夜は星がキレイだね」

良かった。

ホッと安心したからかな、顔が思い切りほころんでいた。

「大丈夫か？」

「なんとかね」

ため息混じりのその声に、オレは急に切なくなってしまう。
部屋の中と、携帯の声とを計りながら・・・

「・・・んあ」

その時、甘く震えた吐息が・・・ミナミの口からこぼれたのが聞こ

えた。

確かに、ウチにいるらしいけど・・・一人じゃないって？
まったく。

腹立たしさが込み上げて、こんなに心配していた自分がアホらしく
思える。

「誰か来てるのか？」

「ん・・・いないよお・・・」

その悩ましい声を聞かされる、コッチの身にもなって欲しい。

シヨックというよりも、改めてミナミの性格を思い知らされた感じ。
お持ち帰りか？それとも、馴染みの？

「オマエねえ、そんなHな声出さないでくれる？」

「ハルキの声聞いてたら、シタくなっちゃってさあ。」

「なんだよそれ、1人でシてんの？」

「そう・・・」

マジかよ・・・ドキドキと心拍数が上がっていくのがハッキリとわ
かる。

携帯から聞こえるミナミの吐息に、すっかりオレも・・・ダメだっ
て・・・

枯れていた欲望が、湧き上がって来る。

「ねえ、スグ来て・・・我慢できないからあ」

その声色に、下半身に熱を感じて・・・
ふと見上げた視線の先に、テレビを見て笑っているトモの横顔があ
った。

「ダメ、そんなワガママ聞きません」

「意地悪う・・・はやくう・・・」

まだ言うか！

オレをこんな淫らな気持ちにさせやがって、どこまで自分勝手なヤツ。

「オレに欲情するなんて、オマエどうかしちゃったの？」

「ハルキだって、公園で欲情してたくせにい・・・」

オレが髪の毛切ったから、スゲー感じてたの知ってんだからなあ」

「う・・・、そんなことないから」

「あははは、冗談！1人Hしてると思ってビックリした？」

いつもの笑い声が携帯から漏れた。

呆れた・・・冗談って・・・本当に？

「オマエねー」

「大丈夫だよ、明日かからしばらく実験で大学に泊り込みなんだよ。昼間、公園に居るところを教授に捕まって、ご指名うけちゃって。」

「わかった・・・風邪ひくなよ」

切れた携帯を手の中で握り締めた。

寒！

ブルブルっと身体が震えた・・・身体に熱を残して。

同じ星空を見つめてたんだな・・・アイツの温もりを思い出しながらオレは夜空を見上げて微笑んだ。

「ハルキさん・・・」

「ど、どうした？」

「すごい手が冷たいよ」

急に握られた手の温もりに、オレはギョっとして隣を振り返った。いつの間にか隣に並んで、オレを見上げていたトモ。

ニッコリと微笑んだその澄んだ瞳・・・アイツと似ている・・・もしかして、オレはトモの中にアイツを見ていたのか？

トモと初めて出逢ったあの日、迷うことなくミナミへ連絡してしまったのは、

この子の中にミナミを見つけてしまったからかもしれない。

「ほら、中に戻って、風邪ひいちゃうから」

冷えた身体に、トモの温もりが沁みこんでくる。

この子の持つ優しさに、オレが溺れてしまいそうになる。

いいのか、それでも？

オレにそんな価値があるのだろうか？

オレは、ヒトの優しさに応えられる人間なのか？

自分の中に潜む氷の塊が、それを許してくれそうに無い・・・残酷すぎた過去が、未だにオレを支配しているのは、きっとオレ自身がその過去を受け入れられないからに違いない。

第25話

このイライラ胸のモヤモヤ、一体なんなんだろう。

近くにいるのに、とても遠くに感じてしまうのはなんでだろう。

こうして手で触れていても、なんだか触っているのは違うものみたいだ。

夜気に冷えたハルキさんの手を引いて、暖かな部屋の中へと連れ戻しても

オレの胸の中は、妙に寒いっていうの？隙間風が吹いている感じ。

ハルキさんは片手の中に握った携帯を見つめて考え込んでいた。

やっぱり、気になるんだ・・・ツヅキさんのこと、とか・・・。

「ハルキさん、オレ大丈夫だから行ってきたら？」

だって心配なんでしょ、ツヅキさんのこと」

「バレバレ？」

「バレバレ。今すぐ飛んで行きたいって顔してるし」

あははは、と大きな声で笑って参ったというように頭を掻いて。

ゴメン、とオレの顔の前で両手を合わせてみせた。

やっぱり、行きたいんだ・・・ツヅキさんのところ。

「スグ戻るから、なんかあったら携帯に電話して」

メモに携帯の番号を書き写して、オレに渡した。

それを受け取って番号を目で追っている間に、ハルキさんは出て行った。

だよね・・・普通に考えても、そうだよ、行くよね。

ソファアーの上のコートを手にとって「ゴメン、スグ戻るから」って。

やっぱイライラするかも・・・モヤモヤしちゃってるかも。
この気持ちってさ、ユウタにも時折感じたりするのと一緒だよな。
彼女、彼女とか騒いでさ、オレのことなんか二の次になってる時
そんな時に感じる気持ちと一緒にかもしれないかもしれないかも？

「なんだかなー、オレ」

独り言が、虚しく響いた。

ユウタめ、なんだよもお、いて欲しい時にいないなんてさあ。

「あー、ムカつくしい」

思い切り蹴飛ばしたクッションは、ユウタの顔にヒット！
え、ヒット？

「んだよ、いてえなー」

「ユウタ！」

顔面で受けたクッションを片手で、オレにポンと投げ返した。
ほんと、スゲータイミングがいい男。

「あれ、ハルキさんは？」

「あー、ちよっと出掛けた」

「あはーん、それでムカついてんの？」

ギクリ。

そんなところばかり、勘が鋭いやツ。

なんで、わかつちゃう訳？

恋愛に関してはエキスパートとか言ってたっけ？

「ブハハハ！嘘、嘘。下で会ったんだもん、ハルキさんに。トモを一人で置いてきちゃったから頼むってさ。」

なーんだ、そうなの？すげーって思ってた。損した。

オレは気が抜けてしまっただけ、

クシヨンを抱いたままソファーにどっかりと腰を下ろした。

「なんで来たの？」

「なんでって・・・メシはいらねーってメールしたけど行かねーとは言っていないじゃん！」

「そうだった？」

なーんだ、そうなの？ちょっと寂しいとか思って損した。

キッチンで鍋の中に指を突っ込んで味見をしながら、ユウタが言った。

「ねー、ハルキさんどうしたの？」

「んー？なんかさ電話してたら心配になったみたいよ」

「ツヅキさん？」

「んー、そうみたい」

小さな声で気が抜けたように返事をしたオレを、ユウタはニヤニヤとした顔でつついた。

「なんだよ」

「なんだよじゃねーよ、オレがいるのにハルキさん、ハルキさんってオレは一体ナンなんだっちゅーんだよお」

「何って、一番の親友じゃねーの？」

「んー、トモ、それが聞きたかったんだよお」

「うげえ、離れろ、キモいちゅーのおお」

いつの間にかオレを遥かに追い越していった背丈、その身体で抱きつかれたら

オレがどうなるか想像つくだろうに、このアホが！

オレは想像通りにドスンと床の上に尻餅をついた。

「アダダダ、ユウタ重い！」

「オマエ、オレを捨てたら許さないからなあ」

「ハイハイ、わかりましたから、退けコラ！」

いつになく真剣な目をしてオレを見下ろしていたから、シャレにならない位にドキドキと、心臓が早鐘を打ち始めた。

「マジで・・・何でも一番にオレに話してよ、オレはトモの親友なんだから」

「うん・・・」

スツと消えた、ユウタの重み。

メシはいらないってメールしてきたくせに、せつせと皿にカレーをよそってる。

初めて見たユウタの切なげに潤んだ瞳・・・なんだよ、焦るじゃんあんな顔されたら。

裏切ってるって気持ちになるじゃん、何一つ、裏切ってないのにさ・・・アホ。

山盛りのカレーをかき込む姿は、いつものユウタだ。

ユウタには・・・オレが変わって見えてるのかな。

第25話（後書き）

前編・完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2064a/>

キミtoオレ

2011年1月20日03時02分発行